剣聖将軍記

やま次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣聖将軍記

【Ｎコード】
Ｎ４３５９Ｙ

【作者名】
やま次郎

【あらすじ】
室町幕府第十三代将軍・足利義輝

彼ほど幕府の復活に力を尽くした人物はいなかったと思う。八代義政以降、彼前後の将軍はどれも見ても傀儡将軍でしかなく、自身の力で将軍親政を目指していたのは彼だけだったのではないか。儚くも時の天下人の間で藻掻き続けるも命を散らすことになるが、彼の周りには後に天下に名を轟かす名将たちがいた。「天下を治むべき器用有」とも称された義輝がもし自らの力（領地＆兵）を手にした

らどうなるか？

それを話にしてみようと思う。

第一幕　天下争乱　―将軍弑逆―

剣聖将軍記

序章　～異見・永禄の変～

永禄八年（１５６５）五月十九日、洛中にて変事が起こった。
足利幕府十三代将軍・足利義輝の住まう居館が突如、軍勢に襲われたのである。

御所を囲む軍勢は、旗印から京畿一帯を領する三好家の手によるものだと判別できた。
また三好家中でもその名を轟かせている松永氏の軍勢もあった。

御所を襲撃している兵は一千足らずだが、三好勢は将軍を逃がさぬよう洛中全体に兵を配備しており、その数千を数えた。対する義輝側は百から二百余り。それも女子供を合わせた数である。僅かながら洛中にいた幕臣らが駆けつけてはいたものの焼け石に水であり、御所の囲みを突破して義輝の下へ辿り着ける者などは誰一人もいなかった。まさに多勢に無勢。義輝の死は絶対であった。

ただ義輝も座して死を待つ気はなかった。

足利義輝、御年三十。
幕府の、武家の長として衰退の一途を辿る将軍家に歯止めをかけ、復権を目指す最中で己を高めることを忘れなかった。その甲斐もあり、故事、礼式に精通、武家の長として恥ずかしくないよう剣術を始めとした武術を悉く修めた。南蛮渡来の鉄砲もなかなかの腕前だ。

しかし、それまでだった。結局は個人の域を出るものではなく、読み漁った兵法書も用いる機会なく死を迎えようとしている。それほどまでに時代は義輝に残酷だった。
前年に三好長慶が死に、将軍親政を目指して反撃に出ようとした矢先のことだった。今少し時間があれば、逆転も可能だったかも知れない。

「もはや考えても詮無きこと！最後は思う存分に暴れてくれようぞ！」

この状況においても逃げ出さず忠義を尽くしてくれている家臣たちが如何に時間を稼いでいようとも、この場で自害して果てるような真似はしない。せめて一矢を報いる。義輝としての最後の意地だった。

もはや宝物としか見られなくなった先祖伝来の名刀の数々を次々と畳へ突き刺し、本来の形で使用しようというのだ。天下に名高き名刀と塚原卜伝と上泉信綱に認められた己の業。それが何処まで三好相手に通じるか、試す最後の機会。

五月雨は　露か涙か　不如帰　我が名をあげよ　雲の上まで

足利義輝、最後の戦いが始まった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝

洛中、三好左京大夫義重（後の義継）の陣内。

「ええい、将軍はまだ討ち取れんのか！」

義重が辺りに喚き散らす。戦いが始まってより半刻（一時間）余り、小勢の将軍を大軍かつ奇襲したのにしては時間がかかっていた。

「少しは落ち着かれよ、左京殿」

「されど日向守。義久（のちの松永久通）めの為体（ていたらく）は目に余る。こちらからも援兵を出すべきではないのか？」

日向守と呼ばれた三好日向守長逸はゆっくりと首を横に振った。そして若い義重を諭すように話し始める

「よいですか。此度のことは理由はどうあれ将軍を殺すのです。天下に悪名を轟かすことになりましょう。なればこそ、義重殿がその悪名を背負うことがあってはなりませぬ」

つまり長逸は自らは兵を繰り出さず、将軍暗殺を松永一手に行わせようというのだ。そうすることにより将軍殺しの汚名は松永が着ることになり、三好家は潔白とまではいかぬとも下手人ではなくなる。それなら後々に新将軍を擁立した後に政敵・久秀を追い落とすことも可能と踏んだのだ。だからこそ共謀したふりをして将軍暗殺に手を貸していたのだ。

長逸は冷静にこの戦いの意味を話していたが、内心は少し焦っていた。それは将軍方の予想外の反撃が理由だった。

（このままでは松永勢は全滅するやもしれぬ。そうなれば嫌でも我らの軍勢を繰り出さねばならん）

四方の門から雪崩れ込んだ松永勢であったが、小笠原民部少輔、一

色淡路守ら幕府奉公衆の反撃に為す術もなく討たれていた。何故なら、主たる義輝も武術に秀でていたが、その稽古に付き合っていた奉公衆らも揃って武術に秀でた者たちだったからである。一人で二人や三人を相手にするなど奉公衆らにとっては造作もなく、一人で十人を斬った者すらいた。だがその奉公衆も圧倒的な数の前に力尽き、次第に数を減らしていく。

この続報に長逸は胸を撫で下ろした。どうやら計画通りに事は運ぶ、と。だが、そんな思惑は次に飛び込んできた報せですぐに吹き飛んでしまった。

「も、申し上げます！将軍方と思われる一団に御所への侵入を許しました！」

「何じゃと！？」

長逸は耳を疑った。洛中には数千にも及ぶ自軍が展開している。御所を囲んでいるのは松永勢だけとはいえ、囲みを突破できるだけの人数が発見されず近づけるわけがない。

「敵の数は分かるか！？」

「そ…それが……僅か１０人足らずでして……」

「うつけが！その程度で狼狽えるな！」

長逸が床几から立ち上がり、使番の肩を思いっきり蹴り飛ばす。その後ろで義重は「義久めがここまで戦下手とは知らなんだ」と呟きながら「日向守も落ち着かれい」と先ほどとは反対の立場で言葉をかけた。

「ふん！」

憤慨しながら自分の席に戻った長逸は、蹴り倒した使番に「将軍もろとも御所内に進入した一団を討て」と命じた。後にこの判断は間違いだったと長逸は悔いることになる。

＝＝

変わって御所内。義輝は一人瞑想に耽っていた。
周囲に味方の姿はなく、あるのは無数の人垣。十は軽く超える。義輝の手には曲がった刀が赤い鮮血を垂らしていた。

「どうした？来ぬのか」
「ひっ！？」

義輝はギロッと雑兵を睨みつける。そこには先ほどまでの戦意はなかった。
ほんの僅か前、将軍を発見した松永兵は『一番手柄』と、勇んで斬りかかってきた。それを一瞬の間に斬り伏せ、二人、三人、四人と倒していった。だが、誰一人として義輝に手傷を負わせることは出来ない。雑兵共は皆、一斉に恐怖した。

「来ぬならばこちらから参るとしよう」

動と静。先ほどまでその場から一切動かなかった義輝が新たな刀を畳から引き抜くと、人垣を飛び越えて一目散に松永兵に近づく。
怯える足軽を上段から一閃。バッサリと真っ二つにした。
侍大将が用いる筋兜ならいざ知らず、足軽程度の陣笠では義輝の一

等から頭部を守ることなど出来ない。ましてや義輝の持っているのは数ある刀の中でも名刀と呼ばれる逸品である。陣笠は綺麗に二つに割れ、頭部からは鮮血が飛び散った。

返り血を浴びた義輝の姿はまるで仁王の如く、周囲を凍り付かせた。義輝は隣の足軽を横一線に斬りつけて蹴り倒し、刀身を胸部に突き立てた。さらに睨まれた足軽は持っていた手槍を力なく繰り出すが、それは軽々と躱され、脇差しで脇腹を刺された。

「ふ……、たわいもない」

屋内であることから義輝を一度に襲える人数は限られている。多対一になったところで一人で百人と戦うわけではない。かといって槍や刀で義輝相手に満足に戦えるものなど現れず、震えた手で弾く弓など躱すのは造作でもなかった。

突然に虚無感が、義輝を襲う。

存分に暴れて斬り死にしてやろうと意気込んでいたものの、実際に戦ってみれば力の差は歴然としていた。戦っても戦っても一方的に相手を斬るだけ。しかもここから見える敵の半数近くは戦意を失いかけている。

（これを斬ったところで、余の心は晴れまい）

ここらが潮時、やはり自害して果てるか。そう思った瞬間だった。遠くから大きな足音が近づいてくる。明らかに集団だ。敵の増援かとも思ったが、どうやら違うらしい。松永兵の様子がおかしい。

途端、いくつもの呻き声が上がり、足軽たちが倒れる。逃げる者を

多数いた。

「ご無事か！公方様！！」

「な…勢州！？」

驚いたことに現れたのは義輝の師・上泉伊勢守信綱その人であった。

「おやおや、こりゃ随分と暴れたようじゃな」

「卜伝殿もか！」

「息災かな、大樹公」

続いて現れたのは塚原卜伝（つかはらぼくでん）。これもまた義輝の剣の師である。流石というべきか、この状況においても周囲を眺め、軽口を叩く余裕がある。

「どうしてここへ？」

「話は後じゃ。まずは……」

と卜伝が言い終わる前に、背後から松永兵が二人に襲いかかった。

卜伝は刀で防ぐ。が、刀が折れてしまう。ここに来るまで何人も斬ったのだろう。無理もない。刀自体が保たなかったのだ。しかし、折れた刀で素早く相手の首筋を斬った。また信綱は初めから刀を持っておらず（途中で失われた）、掌底（しょうてい）で相手に胸元を一撃して怯んだ隙に脇差しを心の臓へ突き刺した。

さらに二人へ松永兵が襲いかかる。二人の危険を察した義輝が後方へ飛び、畳に突き刺してあった刀を二振り引き抜くと、そのまま二人に投げ渡した。

「師！童子切、大典太にござる！」
「ほう……これが……」
「…天下五剣か！」

刀を空中で受け取った二人はそのままの勢いで松永兵に斬撃を繰り出す。するとまるで豆腐を切ったかのように斬れるではないか。鎧もなにもあったものではない。

「……見事な切れ味よ」
「塚原殿。悠長に感慨に浸っている時間はありませぬぞ」
「お…おお、そうであったな。大樹公、我らが来た意味、分かるであろう？」
「御所よりの脱出。つまりは余に生きよ、と申されるか？」
「さてな。されど大樹公が脱出されなければ、儂と勢州はここで死んでしまうな」

卜伝の目が笑っていた。これを見て義輝は「師には敵わぬな」と呟き、死に場所と決めていた御所を脱出することに決めた。過程はどうあれ、大恩ある師二人を自分の運命に巻き込む訳にはいかない。

「北へ落ちる。よいな」
「はっ！」

義輝ら三人が走り出す。すると先ほどまで凍り付いていた一部の松永兵も動き出した。流石に逃がすわけにはいかないと感じたのだろう。しかし、義輝らに松永兵が追いつくことは出来なかった。松永兵は御所内は不案内であり、何処をどう曲がれば北口に出るか知っている義輝に敵わないこと。また何故か義輝が進む先には敵兵の姿はなかった。あるのは死骸だけである。これを不思議に思った義輝だったが、庭先に出たところでその答えに出会すことになった。武

士の集団が松永兵と戦っているのである。しかも武士の集団は皆が皆、目を見張るほど強く相手を圧倒していた。

「豊五郎！退くぞ！」

「叔父上！」

信綱が集団に加勢するが、信綱の加勢を必要としないほど既に一方的な展開だった。彼らが御所内の松永兵を倒したのだと義輝は理解した。

「彼らは柳生。我らの味方じゃ」

「柳生！？松永家中の者ではないですか！」

義輝は柳生の名を知っていた。何せ目の前にいる信綱本人から「柳生の者を弟子にしている」と以前に指南して貰っていた時期に聞いていたからだ。その柳生、今となっては当主である宗厳を始め主立った者は信綱に弟子入りしており、驚くべき戦闘集団へと変貌していた。それが今、義輝の味方として眼前にいる。

「細かいことは後じゃ。北門の近くに塀の一部がまだ普請中の場所があるじゃろう。そこから逃げるぞ」

義輝の住む二条御所は増築中であり、特に掘や土塁など外周部分を堅固にするために普請の最中だった。それもあらぬ襲撃に備えるためだったが、普請が終わる前に襲われるという結末に至ったのは皮肉としかいいようがない。

義輝一行が北へ走り出す。敵も追っては来るが、幸いにも四方に散らばっており、特に門周辺に集まっていたから向かう先に敵は殆どいなかった。（僅かにいた兵は全て斬り伏せられた）塀の隙間から

出り、土塁を飛び超えて路地に出る。流石に北門に陣取っている兵たちには見つかっているが、周囲にはそれほど敵の姿はない。とは言っても遠巻きにいるのだろうが。

「こちらへ」

柳生の手の者の一人が近くの民家に隠してあった馬を連れてくる。これで脱出しようというのだろうが、馬は四頭しかいなかった。

「公方様に付き従うは私と塚原殿。それに疋田豊五郎の三名にござる」

「柳生の者は？」

「公方様もご存じのように柳生は松永の配下です。これ以上の手助けは宗厳殿の立場を思えば無理にござる。されど柳生の者が公方様をお助けしたこと、忘れぬようお願い仕ります」

「うむ、覚えておこう」

四人は馬に跨がり、東に向けて走り出した。もちろんこれを松永兵は追いかけることになるのだが、互いの距離は広がるばかりだった。洛中は碁盤の目のように整備されており、基本的に直線で走ることができる。そこで差が出るのは馬の質であった。義輝たちが乗る馬は実のところ柳生の者が御所近くにあった将軍家の厩より拝借したものであり、地方の大名から献上された駿馬である。逆に追う松永兵は騎馬を許されたとはいえ身分の低い者が乗る駄馬であり、完全武装をしているために重い。その差が、距離となって現れていく。

義輝たちは五条大橋を越えて山科へ向かう。不思議とその先には三好勢の姿はなかった。何故なら、松永の使番に扮した柳生の者が、「将軍は伏見へ逃亡した」と偽りの報せを送り、義重と長逸は全軍を南へ向けていたからである。

【続く】

第一幕　天下争乱　ー将軍弑逆ー（後書き）

初投稿、やま次郎と申します。

元々こういう小説が好きでいろいろと妄想（笑）しているネタがいくつもあり、どこかで書いてみたいと思っておりました。こうやって物語を書くのは初めてなのでアドバイスなど頂ければ幸いです。

また架空戦記なので史実と違う状況（設定）も今回の塚原卜伝、上泉信綱、柳生のように今後も現れます。史実の雰囲気をぶち壊すような真似はしないと思いますが、何せただの歴史好きなだけなので、そこら辺はある程度広いお心で読んで頂ければと思います。

さて、参考までに永禄の変頃の各地の情勢を下記に書いておきます。

永禄八年（１５６５）

上方では三好長慶（前年に死去）が死んだばかりで権力の空白が起こっている。

中国では毛利元就が尼子の月山富田城を猛攻中。

東海では織田信長が美濃攻めの真っ最中。途中、伊勢にも手を出している。

甲信越では武田が上杉と直接対決から外交戦へと路線変更。上杉は関東重視の方針。

関東では北条家が対上杉、対里見戦で一進一退。

奥羽では伊達と最上が融和。蘆名が武田と組んで上杉にちょっかいを出している。

九州では大友が北九州を席巻中。島津は薩摩、龍造寺は肥前統一前。

また今回の永禄の変で記述していない義輝の妻子がどうなったかで

すが、これは史実通りとしています。

生母・慶寿院　自害
正室・御台所　捕縛
側室・小侍従　殺害
子息・輝若丸ら三人（二人？）殺害

最後に個人的なことですが、好きな武将として「時代（条件）が違えば、評価の変わっていただろう」という境遇の武将が好きだったりします。

例えば…
足利義輝（室町幕府が江戸幕府のように盤石なら名君？）
毛利隆元（毛利三矢が健在なら対織田戦線が変わった？）
織田信忠（信長が横死せず、普通に天下を引き継いでいたら？）
松平信康（切腹せず、関ヶ原あたりを迎えていたら？）
武田義信（彼が武田を継げば信玄のように四面楚歌に陥ることもなかった？）
長宗我部信親（彼が存命で関ヶ原を迎えていたら？）
三好秀次（彼が生きていれば家康の天下はなかった？）

ま、このように二代目辺り武将が好きなのですが、この辺りは次回作（もうかよっ！？）で書くかも知れませんね。あっ、でもオーソドックスに信長とかも好きですよ。（でも信玄よりは謙信の方が好きです。それは物語の途中からも出てくると思いますが…）

以上、今後とも宜しくです。

第二幕　脱出　―明智十兵衛登場―

逢坂の関。

二条御所より脱出した義輝ら一行は近江へ逃れるべく、是が非でも通らねばならない場所である。古来より都のある山城と近江を繋ぐ古い関所である逢坂の関は、近江国大津に在する三井寺の支配下にあり、親足利氏の立場にあるのだが、三好・松永らが義輝を襲うのであれば、この地に兵を配しているはずである。案の定、関所に三井寺の者は見えず、三好方と思われる兵士の姿が見える。三十人ほどだろうか、見えない位置にいる者も含まれば多くても倍の五、六十といると考えた方がいい。

「むう……如何するか」

義輝は物陰に隠れて様子を窺っているが、はっきりいって相当量の返り血を浴びている義輝たちの格好は異質であり、とてもすんなりと通れるとは思えない。かといっていずれは虚報で伏見辺りを彷徨っている三好・松永の追っ手も義輝の行方に気が付くはずであり、悠長に考えている時間はなかった。

「こうなれば強行突破しかないか……」

御所での壮絶な乱戦を思えば、この程度の戦いは容易に思えた。しかし、それを師ら二人に伝えようとしたところ、言葉が詰まった。

塚原卜伝と上泉信綱。この二人が肩で息をしていたのだ。特に卜伝の息切れが激しい。義輝は我に返った。二人はかなり高齢である。

信綱は六十手前、卜伝に至っては七十半場である。その二人が危険を顧みずに御所へ討ち入り、挙げ句ここまで騎馬で疾走してきたのである。壮年である自分ですら多少息を荒げているのだ。ここで強行突破をしようものなら自分は抜けれても師二人は力尽きて死ぬだろう。本来なら将軍である義輝は、師を犠牲にしてでも生きるべきなのだろう。しかし、それが出来ないのが義輝という人間だった。

そこへ、偵察に出ていた疋田豊五郎が戻ってきた。この男、信綱を叔父と呼んでいることからも一族の者なのだろうが、歳は若く義輝と同年に思えた。剣の腕も申し分ない。頼りとするならこの男だろう。

「叔父上、意伯が戻って参りました」

「おお、間に合ったか！」

サッと豊五郎の後ろから意伯と呼ばれた男が現れる。

「公方様、紹介が遅れて申し訳ございらぬ。こちらは我が甥の疋田豊五郎。そして者は鈴木意伯と申し、二人とも我が門弟にござる」

「うむ、二人ともよき面構えじゃ。また豊五郎とやら、剣武の才は叔父譲りと見える」

「その御言葉、この豊五郎にとって最高の褒め言葉にございます」

豊五郎が深く頭を垂れる。その下の表情は言葉通り嬉しそうである。若さ故か、正直に顔に出ることは悪いことではない。義輝もそのことで多少は緊張が解れてきた。

だが意伯が戻ってきたのはただ義輝に紹介するためではない。

「もうまもなく大和へ向かっていた明智殿がここへ参ります。合流

後、関所を突破いたしましょう」

そう言うと、近くで集団が近づいてくる足音が聞こえた。足音の聞こえた方へ視線をやると、身なりの悪い十人程度の集団がこちらへ近づいてくる。咄嗟に刀の柄に手をやる義輝だったが、集団は五間（約１０メートル）ほどの距離で止まると、先頭にいた一人だけが近づいてきた。

「このような格好で公方様に御前に参上いたすこと、お許しを。某は明智十兵衛光秀と申します。後ろの者らは皆、公方様の御味方にございます」

明智光秀と名乗る者の格好は粗末だが、物腰は穏やかで高位の武家の出であることが分かった。これが将軍家再興に大きな役割を果たすことになる光秀と義輝の初めての出会いであった。

「急ぎます故に概略のみ説明させて頂きます。まず私が敵の注意を引き、疋田殿、鈴木殿を先頭に後ろの者らが関所へ乱入いたします。公方様は塚原様と伊勢守様らと共に関所を抜けて下さりませ。坂本まで行けば、兵部大輔（細川藤孝）様の兵がおりまする」

「兵部が？」

義輝はここまでの一連の出来事を思い返し、疑問に思った。突如、御所を襲われた義輝。そこへ諸国を放浪しているはずの師二人が現れ、明智と名乗る者が関所突破の支援に来た。さらには腹心の細川藤孝が兵を率いて坂本にいるという。これが何を意味するのか、義輝には分かる。つまりは事前に三好・松永が暴挙に出ることが分かっていたのだ。ならば、なぜ自分に報せなかったのか？

そんな義輝の疑問を察したのか、光秀が答える。

「実は此度の襲撃、公方様ではなく覚慶様と周蒿様を狙ったものでした」
「なんじゃと！？」
覚慶、周蒿とは義輝の弟たちのことだ。覚慶は興福寺、周蒿は相国寺で仏門に入っている。
「兵部大輔様は初め、これは三好・松永の公方様へ対する恫喝と考えました」
「で、あろうな」
昨今、将軍職は義輝の祖父・義澄の血統が受け継いでいる。義輝の父・義晴には兄弟がいないため、その血を受け継いでいるのは義輝の他は弟二人と義輝の子たちとなる。しかし、将軍職を受け継げる血統はもう一つあった。
十代将軍・義稙の血統である。
義稙と義澄は将軍職を争いあった間柄。一度は将軍職を追われた義稙が西国最大の大名であった大内義興と細川高国の支援を受けて義澄を打ち倒し、将軍職に再任された。それをまた追い落としたのが義晴である。それから義輝と将軍職は引き継がれているが、義稙の血統は三好方の勢力圏で生き続けている。もし義輝兄弟、親子に何かあれば将軍職を継ぐは義稙の血統となる。
「それを知ったのが二日前。公方様に仔細を御報せする間もなかった故、兵部大輔様は独断で我らを救出に差し向けました。その途上で襲撃の対象者に公方様が含まれていることを知り、周蒿様救出に向かっていた塚原様、上泉様、そして覚慶様救出に向かった我らが

急遽公方様の救出に向かった次第」

光秀の説明で概ね理解した義輝だったが、同時に弟たちの安否が気になった。

「ご安心あれ。覚慶様救出は和田伊賀守（惟政）様が、周蒿様救出には一色式部少輔（藤長）様が向かっております」

またしても光秀が義輝の心を察して答える。

「大樹公、時間が惜しい。積もる話は坂本に着いてからにしようぞ」

少しばかりの休憩で息を整えた卜伝が促すように義輝へ話しかける。

「左様ですな。で、明智とやら。如何にして奴らの注意を引き付ける？」

「はっ！これにございます……」

光秀が後ろを向き、手招きで配下の者を呼び寄せる。配下の者は、細長い木箱を担いでおり、光秀の隣にその木箱を置くと、蓋を開けて中身を取り出した。

「これは……鉄砲ではないか！？」

木箱の中に入っていたのは鉄砲だった。それも三挺。

火薬、弾を込め、火薬を置き、火縄を付ける。射撃までの一連の動作を光秀は流れるように行う。それを三挺とも行う。

「公方様、参ります。御仕度を……」

「うむ」

光秀は鉄砲を抱えると関所から半町（約５５メートル）ほどの距離まで近づく。まだ気づかれない。

配下が二挺を持ってついていく。まだ気づかれていない。

片膝をつき、狙いを定める。兵の一人がこちらの様子に気づいた。

火蓋を切り、発射態勢に入る。気づいた兵が指揮官らしき男へ報せる。

まだ撃たない。指揮官らしき男は周辺に指示を出している。

バンッ！

銃声がし、指揮官らしき男が倒れた。

「次ッ！」

光秀が配下から鉄砲を受け取ると、素早く射撃体勢に移る。

バンッ！

先ほどとは違い、即座に撃った。一人倒れる。

再び鉄砲を受け取り、構える、撃つ。もう一人倒れる。

「今じゃ！」

鉄砲を放り投げると、抜刀、配下に合図を出す。後方に控えていた

残る八人が一斉に弓を構え、放った。八本の矢が飛ぶ。しかし、どれも三好兵を仕留めるには至らない。だが兵たちは動揺している。

「うぉぉぉ！！」

大きな喚声を上げ、豊五郎と意伯を先頭に武者たちが関所へ乗り込む。動揺している雑兵など豊五郎の敵ではない。即座に一人斬り伏せる、二人、三人と斬りつけた。それに負けずと意伯も二人を斬りつける。中には反撃してきた兵もいたが、力の入っていない斬撃は簡単に防がれ、返す刀で冥土へ送られた。

光秀配下の男たちも大いに暴れる。が、こちらはそれなりの腕は持つとはいえ屈強の者というわけではない。反撃を受けて負傷する者もいる。うち一人が手槍で肩を貫かれる。

そこへ義輝が騎馬で乗り込んできた。

横から割り込んで馬腹をそのまま三好兵にぶつけ、吹っ飛ばした。そして男の肩に刺さっている槍を刀で斬り落とした。

「あ…ありがとうございます……」

「よい。それよりも先へ行け。その怪我ではまともに戦えぬ」

「し…しかし……」

「構わぬ」

その言葉に男は躊躇する。男の使命は義輝を守ることであって、義輝を置いて先へ行くことなど出来ないのだ。

「大樹公の護衛は我らに任せよ」

同じく騎馬で関所に乗り込んできた卜伝が義輝と同じように男へ脱出を促す。だがそれでも男はこの場を離れようとしない。残った片腕で刀を構え、義輝を守ろうとする。

（この男も命を賭して余を守ろうとしておる……）

御所で多くの者が死んだ。苦難を共にしてきた忠臣たちが多く。そして名も知らぬ目の前の男の命も消えかけている。これ以上、自分のために他人を死なせたくない、という想いが込み上げてくる。

「ならば余から離れるな。余と共にあれば、死なせはせぬ」

と言って義輝は騎馬から降りた。

「大樹公！？」

この行動に卜伝と男は驚く。しかし、義輝は自ら敵兵に近づき、斬撃を振るう。やむ得ず卜伝と信綱も馬から降りて義輝を追いかける。

将軍の存在に気づいた三好兵が一斉に義輝へ近づく。相手は四人。

「義輝公！！」

義輝の下へ向かう敵兵に気づいた光秀も慌ててその場を離れる。

三好兵の一人が手槍を義輝に突き出す。身体を捻ってこれを避け、右手で槍を掴む。そのまま力任せに槍を引っ張ると、左手の刀で三好兵の喉元を斬り裂いた。血飛沫が飛び、義輝の身体を覆う。それに一瞬戸惑いを見せた兵たちを義輝はギロリと睨み付けた。

赤く染まった義輝の姿を見て、兵たちは怯えた。為す術もなく一人が斬られ、二人は駆けつけた信綱と光秀に斬られた。

「公方様ッ！御自身の立場を理解なされませ！」

まるで親が子を怒るかのように、信綱が義輝を叱責する。将軍に対し、このような物言いが許されるのは天下広しと言えど剣の師である信綱と卜伝くらいだろう。

「皆の者、円陣を組め！」

光秀が指示を出し、全員が義輝のいる場所へ一斉に集まる。

「このまま一斉に東へ抜けます」

「……それでよい」

光秀は敵に聞こえないよう周囲に小声で指示を出す。その様子を隣で見つめる義輝。

（この男……、鉄砲が得手だけでなく剣術も達者ときた。しかもこの状況で適格に指揮を執るなど、一廉の将と見たが……何者だ？兵部の家臣ではあるまい）

義輝は光秀に対し、強い興味を持った。光秀が藤孝の家臣ならば、何かしらの折に見かけたことがあるはずだったが、それはない。何処かの家中の者が藤孝に協力しているのだろうと思ったが、何処の家中か想像つかなかった。

義輝がそんなことを考えているなど露とも知らない光秀は、指示を出し終わると配下に合図を出した。

「行けッ！」

全員が一斉に東へ駆け出す。そうはさせまいと三好兵も立ち塞がるが、数こそ三好方が多かったが、その強さは義輝方が圧倒的だった。そもそもこの襲撃の指揮を執っている三好長逸は最初の襲撃で片が付くと考えており、この地に配していた兵は言わば形だけの存在であり、数を集めただけだった。名実ともに『剣豪』である義輝らとまともに戦える者はいない。まさに圧倒的だった。このまま戦い続ければ三好兵を全滅させてしまうのではないかというほどに。しかし、義輝たちの目的は関所の突破であって敵の殲滅ではない。最初の一撃で包囲網が破られると、堰を切ったように義輝方が囲みを抜け出た。それを追う余裕は、三好方にはなかった。

負傷四名。義輝たちは一人の死者も出すことなく逢坂の関を突破した。この先は江南に勢力を持つ六角氏の勢力圏であるために容易に追っ手を差し向けることは出来ないと思われる。義輝は突然の襲撃から生還したのだ。

歴史が変わった瞬間だった。

【続く】

第二幕　脱出　―明智十兵衛登場―（後書き）

第二回、投稿です。

いや、文章を書くって難しいですね。戦闘シーンとかもう大変です。

さて、早くも明智光秀登場です。本文中では何処かの家中と書いていますが、まぁすぐに明らかになりますし、想像通りです。特に特別な設定はありません。（ただ早く登場させたかっただけ）

また更新頻度ですが、ある程度の構想は出来上がっているので上手く行けば1週間に1回（目標は2回）出来ればと思っています。良ければ続けて見て頂ければ嬉しいです。

第三幕　逃避行　―三好・松永の追撃―

五月十九日、夕刻。

大津の宿場で馬を手に入れた義輝一行は、近江坂本で細川兵部大輔藤孝の軍勢と合流した。

「上様！ご無事で！」

「おお、兵部！」

義輝の姿を確認した藤孝が駆け足で近寄る。また義輝も腹心の出迎えにようやく安堵感を覚えた。

「兵部の機転の御陰ぞ！大義じゃ！」

「いえ、上様の身を危険に晒してしまいました。この不始末……御詫びのしようがございませぬ」

藤孝が地面に額を擦りつけ、平蜘蛛の様に平伏して謝罪の言葉を口にする。

「よい…よいのじゃ。余はこの通り生きておる」

「はっ…。塚原様、伊勢守様、上様の御助け頂いた御恩、一生忘れませぬ」

藤孝は僅かに上体を上向け、義輝の両隣に控える卜伝と信綱に礼を述べる。

「それは違うぞ、兵部。恩を受けたのは余であり、そちではない」

と、言うと向き直り、義輝は自分の救出に尽力した者たちへ話しかける。

「塚原殿、信綱殿。これまで方々より頂いたものは数知れず、尚も窮地を救って頂きました。その礼として、その童子切と大典太を差し上げます」

これには流石の二人も驚いた。童子切と大典太は義輝の持つ鬼丸国綱、二条御所で失われた三日月宗近、甲斐国久遠寺に納められている数珠丸と合わせて『天下五剣』と称されるほどの逸品である。それを下賜されることは、剣術家としては最高の誉れ。

「その二振りは天下の名刀。名刀は使い手を選びまする。御二人であれば、申し分はござらぬ」

「左様か、ならば頂いておこう」

素直に礼を受け取る信綱に対し、卜伝は刀を手に取って黙り込む。そして……

「儂は遠慮しておこう。近く、まともに剣を振るうこと適わなくなる身じゃ。此度の事で、それがよう分かった」

「何を仰います！塚原殿の剣捌き、まこと見事なもの。まだまだ若い者には……」

「儂のことは儂が一番よう知っておる。だからといって信綱殿が貰うことにケチを付けているわけではない。儂が持つよりは、豊五郎、そちが貰っておけ」

「わ…私がッ！？」

突然の指名を受けた豊五郎は思わず仰け反った。驚きで次の言葉が出ないほどに。

「無論、師の信綱殿と大樹公の許しがあればだがな」
「私なら構いませぬ。豊五郎の腕前、けしてその刀に劣らぬものと思っております」
「余も異存はない。豊五郎にも恩賞を与えなければならぬしな」
「は……有り難く頂戴いたしまする」

大きな体躯を小さくして刀を受け取る豊五郎。また鈴木意伯には義輝が持っていた正宗の脇差しが与えられた。

「さて明智にも何か褒美を与えねばならぬが、すまぬ。今の余にはそちに与えられるものがない」
「私など気にかけることもございませぬ。その御気持ちだけで嬉しゅうございます」
「そうか」
「それよりも公方様。まずはこの場を急ぎ離れましょう」
「ん？」

今いる坂本は六角氏の勢力圏内とはいえ、三好の勢力圏とも近く、奴らが将軍を襲うという暴挙に出た以上は何があっても不思議ではなかった。

「離れるということは、朽木谷か？」

朽木谷は湖西・近江高島郡に位置する将軍家の避難所である。先代の義晴も京を追われる度に坂本より朽木谷へ避難した。幼少期の義輝も同行している。

「は…。まずは」
「まずは……とは、如何なることじゃ？」

「実はこの光秀、朝倉家に仕えております」
「左衛門督にか？」
藤孝が補完するように話す。
「……ふむ」
義輝が考え込む。
越前一国を領する朝倉を頼ることは理解できなくもない。しかし義晴方として京に軍勢を送り込んでいた先代の孝景とは違い、現当主の左衛門督義景は上方の政情には一切の興味を示さず、義輝の協力要請を何度も理由を付けて断っていた。そのため、義輝は朝倉が今さらになって自分を受け入れる意味が理解できないでいた。
「我が主は公方様を受け入れることを了承しております」
「まことか」
光秀はまるで以前から決まっていたかのように淡々と話すが、実はこの時、光秀は嘘を言っていた。確かに光秀は朝倉家に仕えているが、義景は義輝がどのような状況下にあるかまったく知らないでいた。そもそも興味がないのだ。しかし、光秀には考えがあった。一方的に義輝が越前へ赴けば、義景は受け入れるしかないと。
「う…む。ならばともかく朽木谷へ参るとしよう。兵部、案内を頼む」
「はっ、承知いたしました」
義輝一行は藤孝の軍勢に守られながら朽木谷を目指すことになった。

＝＝＝

京・三好政康邸。

将軍・義輝の暗殺に失敗した三好三人衆、松永親子が集まっていた。

「あれだけの軍勢を擁しておきながら将軍を取り逃がすとは何たるざまか！」

開口一番、松永弾正少弼久秀が実行犯である三好長逸らを罵った。久秀には分かっているのだ。長逸が実子・久通に将軍暗殺の汚名を着せるべく、積極的に兵を動かさなかったことを。それが将軍を逃がしてしまった最大の要因となったことを。仮に三好勢が洛中に配していた兵を全て将軍暗殺に向ければ、流石に義輝も命はなかっただろうことは明白だった。

「ふん、貴様とて覚慶に逃げられておるではないか」

事実、久秀は担当していた興福寺の覚慶の捕縛に失敗しており、まんまと逃げられていた。が、この事自体は将軍に逃亡されたことと訳が違う。

「将軍に逃げられることと、仏門に入っている弟に逃げられることを同列に扱って貰っては困る」

二人は責任の擦り付け合いに終始している。何の意味もない会話だ。それよりも今後、どうするかが問題であり、政康がその事を指摘した。

「まずは将軍の行方を捜さねばならぬ」
「将軍は逢坂関を通ったのであろう？ならば六角領に逃げ込んだのではないか？」
逢坂関で将軍一行らしき人物は通ったことは報せを受けていた。ならば先に義輝が京を追われた際、江南に勢力を持つ六角承禎（義賢）の援助を受けているので、今回もその伝手を頼ったものだと思われた。
「いや、それはない」
と、久秀が即座に否定する。
「なぜ言い切れる」
「六角領に将軍が逃れた、という報せを受けておらぬからだ」
「だからなぜそう言い切れるかと聞いておるのだッ！」
長逸が声を荒げる。しかし、久秀は惚けたまま答えようとしない。長逸は確かに三好一門ではあるが、久秀も前当主・長慶の娘の正室に迎えておりほぼ同格にある。現在の当主である義重から問われない限り、仔細を明かさなくても良いのだ。（ちなみに義重はこの場にいない）長逸は目的こそ同じ為に行動を共にしているが、久秀のこういう独断性の強いところを嫌っていた。
「それよりも将軍の御台を捕らえたと聞いた。まことか？」
「ん？ああ、確かに捕らえてはいるが……」
「ならば儂に渡して貰おう。使い道がある」
「それは構わんが、それよりも将軍の行方だ。このままでは拙い」
長逸にとって、将軍の御台などどうでもいい存在だった。それより

も将軍の息の根を止めなければ、今ある立場が危うい。それが大事だった。

「将軍は恐らく朽木谷だ。仕留める気があるのなら軍勢を遣わせ」

「朽木谷か…確かにその可能性もある。が、兵を出せば六角が黙ってはいまい」

「ああ、その心配はない」

なぜか六角のことになると久秀は確定的なことを言った。しかし、当の久秀自身がその問いに答える様なことはなかったために理由は定かではなかった。ただ久秀の言うことを事実として受け止めるしかなかった。将軍を京から追ったにも関わらず、長逸らは追い詰められていた。

「下野（政康）。阿波より義親（後の足利義栄）を呼び寄せておけ」

「なに？しかし将軍は健在だぞ？」

「構わぬ。もはや将軍を討てるかどうかは問題ではない。時間との勝負だ」

三好三人衆と松永久秀の目論見は、将軍・義輝を暗殺し、阿波にいる足利公方・義親を新たな将軍へ据えることだった。言いなりにならない義輝に代わり、義親を将軍に天下を采配する。なに、酒と女を与えていれば何とでもなる。そう考えていた。

「わかった。ともかく我らは朽木谷へ兵を出す。それでいいのだな？」

長逸が久秀に確認する。語気から納得のしてないことは分かるが、久秀の言うとおりにするしか方法がないことを理解しているため、やむを得ず従う。

「ああ、それでよい。ともかく御台を我が屋敷に移して貰う。まずはそれを急げ」

そう一方的に命令した後、久秀は屋敷を退去した。最後まで久秀は将軍暗殺に失敗した我が子へ言葉をかけることはなかった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

五月二十一日。
近江高島郡・朽木谷城

この地で義輝はようやく一時の安息を得ることが出来た。この時までに、義輝には吉報と凶報の二つが届けられている。

吉報とは和田伊賀守が興福寺の覚慶救出に成功したということ。
凶報とは一色藤長が相国寺の周暠救出に失敗したこと、である。

またこの地に着くまでに剣術の師である塚原卜伝が単独で陣列を外れ、姿を消していた。これについてはそれほど気にはしなかった。元々気まぐれな人物であり、単に役目を果たしたから去って行っただけだろう。

しかし、この地での安息は義輝の気を一時でも休ませてはくれなかった。

(余はまんまと生き延びてしまった。家臣を見捨て、妻子を守れず……何が将軍ぞ！何が武家の棟梁か！)

義輝はこれまでのことについて自問自答を繰り返していた。だが前向きな答えは一向に出ない。不甲斐ない今の自分を許すことが出来ないのだ。

そこへ義輝を突き動かす一つの報せが入ってくる。

三好勢凡そ五〇〇〇、朽木谷を目指して行軍中。

瞬く間に城内は戦慄した。朽木家が擁する兵は最大で五〇〇ほどであり、まともに三好勢と戦える力はなかった。報せを受けただけで城内は混乱に陥り、誰もが義輝へ退去を進言してきた。しかし、義輝はそれらを一蹴する。

「狼狽えるでないわ！うぬら我が奉公衆であろう。三好輩など恐れるに足らず。堂々と迎え撃てばよい」

とは言ったものの、義輝もまともに戦って勝てるとは思っていない。しかし、もう逃げるのは嫌だった。それよりは堂々と戦い、死にたいと思っていた。そんな義輝の胸中を知らず、藤孝は朽木谷からの退去を諫言する。

「ここで戦っては無駄死にするだけです。そうなれば塚原様らの働きが無に帰してしまいます！」

「それは……分かっておる！しかし余は、御所で家臣らに冥土で会おうと言った。このままおめおめと生き延びれば、あの世におる妻子らにも寂しい想いをさせる」

義輝は軽い自暴自棄に陥っていた。安息の刻が義輝に考える間を与えたが、いくら考えても将軍暗殺に及んだ三好・松永らに勝てる方策は思い浮かばなかった。だから、ならば、とここで死ぬ決意を決

めたのだ。

「なりませぬ！なりませぬ！」

藤孝が必死に翻意を促す。しかし、義輝は一向に取り合わない。その間にも三好勢は朽木谷へ僅か一刻（二時間）のところまで迫っていた。

「良かった！間に合いました！」

そこへ明智光秀が飛び込んで来る。

「公方様！今すぐ越前へ御移り下さりませ。国境まで行けば朝倉左衛門尉（景紀）様が出迎えに参ります」

「光秀殿。それはまことか？」

その報せに藤孝が喜色を浮かべる。

「はっ！道中に浅井備前守（長政）様の御領地がありますが、通行の許可は得ております」

「なんと！」

光秀は義輝と共に朽木谷へ着いてすぐ、越前へ戻っていた。それより僅かに二日、朽木谷に戻ってきたばかりか出迎えの仕度を万端整えて来ていた。並の才能ではない。（実際は一乗谷まで行かずに敦賀の景紀を訪ね、浅井の小谷城へ赴いて船で琵琶湖を越えて朽木谷へ戻った）

「よい、明智。余はここに残る」

が、尚も義輝は動こうとしない。

「何故にございますか」

無礼と承知ながら、光秀は義輝へ理由を問いた。

「越前へ逃れたところで、余はまた三好から逃げ続ける日々を送るだけじゃ。奴らには勝てぬ。ならばそのような生き恥は晒しとうない。ここで戦い、せめて一矢だけでも報いてくれる」

と、己の決意を告げる。が、光秀はそれをまったく意に介さずに自らの想いを述べた。

「勝てまする！」

「なに？」

「勝てる、と申しました！」

義輝は光秀の“勝てる”という言葉に心を動かされた。三好家との戦いは今回だけではない。天文一八年（１５４９）に三好長慶が管領・細川晴元を追った時よりずっと続いていることである。それから一六年、義輝はずっと三好家打倒に費やしてきた。その三好家に、この男はいとも簡単に“勝てる”という。心を惹かれない訳がなかった。

「朝倉は二万の兵を抱えております。また盟友・浅井も一万余の兵力を有しており、若狭には公方様の義弟・義統様がおり、江南の六角殿も公方様の御味方にございます」

光秀は都合の良いことを言い続ける。確かに表向きは光秀の言うとおりだ。しかし、現実はそうはいかない。朝倉は加賀一向宗との交

戦中であり、二万の兵を上洛させることは不可能。また若狭も現当主の義統と前当主の信豊との間で内乱が起こっている。さらには浅井と六角の関係は最悪であり、将軍の命と言えど協力するとは思えなかった。しかし、光秀にとってはそんなことはどうでも良かった。都合の良いこと並べ立ててでも義輝へ翻意を促し、越前への動座に同意してくれればいいのだ。現に義輝の心は揺れ動いている。義輝としてはここで華々しく死ぬのも良いが、本音としては苦しめられてきた三好家を滅ぼし、妻子や家臣たちの仇を討ちたいという気持ちがある。それを光秀は知っていた。

「さらには越後の上杉様も、公方様の為に兵を動かされましょう」

これがとどめの一撃となった。もちろん光秀は越後国主・上杉輝虎のことなんて全く知らない。知っているのは義輝の要請に応え、五千もの兵と共に上洛したということだけだ。しかし、そんな大名は全国の何処にもおらず、義輝が越後上杉を頼りとしていることは簡単に想像できた。

そのことを指摘された義輝も、胸中では“輝虎ならばあるいは…”という想いがないわけではない。

「……分かった。余は越前へ移る」

ようやく義輝が越前への動座に同意する。しかし。義輝には一つ心配の種があった。

「元綱。そなたも余と参れ」

朽木弥五郎元綱。この朽木谷一帯を治める領主であり、幕府奉公衆の一員である。既に奉公衆は瓦解しており、生きている者は僅かで

ある。元綱はまだ十六であり、死なせたくなかった。

「いえ、公方様の御供をしたいところですが、朽木谷は我らの本貫にございます。当主たる私が離れる訳には参りませぬ」

「ならぬ！ならぬぞ！そなたが動かねば、余も動かぬ！」

これ以上、家臣を失いたくない義輝は、是が非でも元綱を連れて行くつもりだった。そこへまたしても光秀が助言する。

「元綱殿。我らはこれより公方様に伴って越前へ落ちまする。まもなくこの地には三好勢が押し寄せて参りますが、いきなり攻撃を仕掛けるような真似はしないでしょう。降伏の素振りを見せ、半日だけ持ち堪えて頂きたい」

「半日？それで良いのか？」

「はい。半日たったところで、本当に降伏して下さって構いませぬ」

「しかし、奴らは公方様の居場所を聞き出そうとするのでは？」

「その時は正直に御答えになって下さい。越前におると」

「答えて良いのか？」

「ええ。そうすればこの地を追われることも命を取られることもありますまい。どうせ三好が公方様の居場所知ったところで、何も出来ませぬ」

光秀の言うとおりだった。越前朝倉は二万の兵を抱える。京まで派兵するとなれば全軍を出すことは適わないが、越前国内で戦となれば嫌でも全軍を出す。しかも三好家が越前を攻めれば、後方を浅井家に衝かれることになり敗北は必至。その上で勝つには朝倉・浅井両方に備えるだけの兵力を差し向けるしかない。しかしただでさえ周辺国に敵を抱え、本国・阿波と海を隔てている三好家にそれだけの軍勢を越前へ送ることは不可能だった。

「見事じゃ！明智！」

光秀の見事な策に義輝は素直に感動を覚えた。自らの胸中を図り、それらを解決する策だったからだ。

「兵部。各地に散らばっておる者どもらに余が越前へおることを伝えい。越前にて再起を図るぞ！」

「はっ！承知！」

光秀の策で立ち直った義輝の言葉で全員が外に出る。己の役目を忠実に果たすために。

こうして義輝ら一行はようやく辿り着いた朽木谷の地から越前に移ることになった。

【続く】

第三幕　逃避行　―三好・松永の追撃―（後書き）

第二幕ですが、第三回です。（ややこしいですね）

義輝が越前へ移るのは史実の義昭に沿ってのことです。（若狭経由ではありませんが…）将軍でなかった義昭を受け入れたのですから、将軍たる義輝を受け入れないわけがない。そう思いました。まぁ本文中では光秀の独断ということになっていますが、史実でも動きを見せなかった義景のことです。こういう展開もありかと。

またいきなり義輝の許を去った塚原卜伝ですが、ネタバレしますが本編中ではもう登場しません。（年齢が年齢ですし）ただ時間と連載が進めば補完的に卜伝が主人公の外伝を書くかも知れませんが、あまり期待しないで下さい。（信綱の方はもう少し活躍します）

※追記

初投稿作品で使い方に慣れず、タイトルが分かりづらく（第三回なのに二幕とか）なっていたのを修正しました。

第四幕　越前朝倉　―一乗谷評定―

五月二十四日。
越前・一乗谷城。

日も落ちた頃に義輝は敦賀郡司・朝倉景紀の軍勢に守られながら朝倉氏の本拠・一乗谷へ入った。とりあえず義輝は城下の安養寺へ案内された。

翌朝、義輝は寺の庭先から一乗谷を眺めた。

朝倉家は初代越前守護・朝倉敏景が一乗谷へ本拠を移してより凡そ百年、この地から越前を治めている。本拠たる一乗谷城は一乗山の尾根に長く築かれており、南北半里強もの大きさを誇る。足羽川を天然の堀とし、東・西・南は山に囲まれている。まさに鉄壁。

昨夜は暗くて分からなかったが、翌朝になって一乗谷の大きさが一望できた。また城下の賑わいも流石に京ほどではないが、相当なものだ。かなりの人間が住んでいるだろう。

（朝倉左衛門督……侮っておったが、一乗谷がこれほど繁栄しておるとは……。案外、期待できるやもしれぬ）

朝倉二万を自在に操るほどの男ならば、対三好戦の中核を担える。そう思った義輝であったが、そうそうに期待を裏切られることになる。

正午を迎える手前、左衛門督義景が家臣団を引き連れてやって来た。形式的な挨拶を受けた後に評定を開くことになっている。もちろん

三好討伐についてだ。

現れた義景の姿を見て、義輝は唖然とした。

（まるで公家ではないか……）

華奢な体躯におっとりとした顔つき。顔色も青白く何より目が死んでいる。義景の姿に、戦国武将たる威厳はまったく感じられなかった。

反面、朝倉家臣から見た義輝の印象は違った。

体躯は平均よりやや大きい程度だが、筋肉質な身体は戦国武将に足るものであり、顔には真新しい刀創、眼光は鋭い。また生まれからくる高貴さも漂わせている。何より数日前まで死闘を演じていた義輝からは覇気が溢れていた。

「左衛門督義景にございます。まずは上様が御無事であったこと、祝着に存じます」

義景が挨拶する。それに対し、

（征夷大将軍ともあろう者が、命からがら恥も外聞もなく京を追われて何が祝着なものか！）

と胸中で叫ぶ義輝だった。

「うむ。余は此度、不覚にも京を追われたが、再び京に戻り、逆賊を討ち滅ぼす覚悟である。その為にも左衛門督の力、頼りにしておるぞ」

しかし、こう言わなければならない今の己の無力さを呪うしかなかった。

「勿体無きお言葉にございます。当家に全て御任せあれ。必ずや京への道、この義景が切り開いて御覧に入れましょう」

そう義景が立派に決意表明するが、その語気にはまったく力が入っていない。義輝は落胆した。これでは朝倉の兵も頼りにならない。そう思ったが、義景の後ろに控える家臣団の中にはそれなりに骨のありそうな者も垣間見えた。朝倉家とて無為に百年もの間、越前を治めていたわけではない。当主が戦に出ずとも、名将として武名を轟かせた朝倉照葉宗滴が鍛え上げし軍団は未だに健在だった。

「上様は帰洛を求めてござる。よって上様が京へ戻られるための策を講じて頂きたい」

いよいよ評定が始まった。藤孝が進行を行う。その手始めに義景に対し、意見を求めた。

「当家が声をかければ、近江の浅井が合力することは必定にございます」

が、中身は乏しいものだった。

浅井長政。江北三郡を治める若き太守である。永禄三年（１５６０）に起こった野良田合戦では六角軍二万五〇〇〇を一万一〇〇〇で破ったことは記憶に新しい。しかもこの戦、長政にとっては初陣であり、このように華々しく初陣を飾った例は珍しい。そんなことだから、義輝自身も長政には期待を持っている。しかし、朝倉と浅井が

仲が良いことは誰もが知っていることだった。

（他に案はないのか）

義輝と藤孝も朝倉・浅井の両家連合を基礎に物事を考えている。だが義景はそこしか考えていなかった。そこから先の案なんて、義景にはない。何故なら義景自身、二日前まで義輝が自分のところに来るなんて思っていなく、二日前に景紀から報せを受け、もうこちらへ向かっているというから受け入れるしかなかった。義輝の手前、『迷惑だから出て行け』とは言えないだけなのだ。それでも二日間は考える時間があったのだから、少なからず何か案が出てきてもよいはずなのだが、元よりそんな智恵は義景になかった。

（それでようも『当家に全て御任せあれ』などと言えたものだ）

そもそも朝倉は長年に亘って浅井家としか同盟しておらず、朝倉・浅井で何事も何とかなると考える風潮がある。今回のことも朝倉首脳陣はそれ以上のことは考えていなかった。

「皆々方、三好・松永を侮ってはなりませぬ。先年、教興寺の合戦で三好修理（長慶）が動員し軍勢は、六万にも及びます。それを念頭に、策を講じられたい」

藤孝の話に場がざわめく。

無理もない。朝倉と浅井が上洛に動員できる兵は凡そ二万余である。それですら大軍なのだが、相手はその三倍の兵となると怖じ気づきもする。しかし、義輝も藤孝も今の三好に六万もの兵が動員できるとは思っていない。

三好の版図は全盛期から大きく変化していないが、三好長慶を失っている。この事で上方の反三好勢力が勢いづいており、その中核が義輝なのだ。機先を制されて京を追われはしたが、反三好勢力はどれも健在。もし義輝が朝倉・浅井と上洛軍を発しても、全軍をこちらへ向けることは出来ないだろう。せいぜい三万数千、これが義輝の見立てだ。

「恐れながら……」

末席で一人の武者が声を上げる。

「何者か？」

「左衛門尉景紀の子、景恒にございます」

朝倉景恒。昨年の加賀攻めで兄を亡くし、敦賀郡司職を継いでいる若き一門である。

「景恒。上様の御前ぞ。若輩者が出しゃばるでないわ」

上席から声が飛ぶ。一門衆の筆頭として紹介された朝倉式部大輔景鏡（かげあきら）である。この発言に景恒の父・景紀も眉をしかめている。この両者、仲が悪いのだ。それも景恒の兄が加賀攻めの陣内で景鏡との口論の末に自害したからだ。

「よい。考えがあるのなら申すが良い」

義輝が制す。

見苦しい。そう義輝は感じたのだ。意見があるのなら言えば良い。それがどんな者でもだ。でなければ評定に参加している意味がない

というもの。それに若い者なら尚さら聞いてやらねば不満は溜まる一方となる。本来ならばこれを制するのは当主たる義景の役目なのだが、当の義景は景鏡寄りの考えのようで、義輝の裁定に不満があるようだ。表情は僅かにしか変わっていないが、分かる。生まれてよりずっと人の顔色を窺って生きて来なければならなかった義輝だ。このくらいは読める。

発言を許された景恒は揚々と話し始める。

「まずは若狭に兵を入れるべきかと」

「若狭へ？」

「はっ。若狭は今、守護の義統殿と先代の信豊殿が争っております」

「うむ。知っておる」

「義統方には当家が、信豊方には三好が支援しております」

「それも知っておる」

要は若狭において朝倉と三好が代理戦争を行っているのだ。現時点では義統方が優勢。しかし、予断を許さない状況にある。

「もし当家が公方様を戴いて上洛した場合、信豊方に背後を脅かされる可能性がございます。その前に、若狭を完全に義統殿でまとめる必要がございます」

「そうすれば、上洛の折に若狭の兵をも使えるか」

「御意」

流石に若狭と接する敦賀郡を治める景恒だ。若狭の事情に明るい。多くは父の景紀が手にしたものだろうが、着眼点は評価できる。

「されど余としても出来るだけ早く上洛したい。早々に若狭の争乱を鎮められるか？」

「公方様の御出馬があれば……あるいは」

自らの出馬。それは義輝も上洛まで考えていなかった。

「控えぃ！公方様に出馬を求めるとは図に乗るでないわ！」

「そうじゃ！そうじゃ！」

席上から景恒に向けて野次が飛ぶ。どれも景鏡派の者たちだろう。やはり見苦しい。これで上洛が叶うのか。そう思う義輝だったが、景恒の案は捨て難い。義統は義弟であり、若狭に自らの影響力を強めるために出て行った方がよいかも知れない。

「よい。余が出向こう。仕度を頼む」

「はっ！はっ！！」

景恒が頭をぶつけるのではないかと思うほど、勢いよく頭を垂れた。よほど嬉しかったのだろう。それほどまでに景恒は家中で孤立していたのだ。義輝の同意が得られたことで、今回の若狭出兵は景恒が采配できる。加賀攻めではないが、兄の無念も少しは晴れる。そう思った。

「公方様。上洛を目指すには、加賀一向宗との和睦が不可欠にございます」

今度は景鏡が意見を述べてくる。元々持っていた意見なのか、景恒に遅れまいとしたのかは分からないが。

「我らが越前を留守にすれば、一向宗が国内に雪崩れ込んでくることは必定にございます」

「で、如何にすればよい」

「当家を加賀守護に任じて頂けないでしょうか。その上で加賀へ攻め入り……」
「それでは火に油を注ぐだけであろう」
「そ…それは……」

言葉が詰まる。結局は景恒の意見が取り入れられたのに触発されて発言しただけだったか。自尊心が強い。それだけの人物。それが義輝の景鏡評になった。その景鏡が大きな顔をしていられる家中など、やはり底が知れている。

「事を荒立てる必要はない。要は余が上洛する間、じっとしてくれればよいのだ。奴らの大半は農民がほとんど。こちらから攻め入り、田畑が荒らされる心配がないと分かれば和睦にも応じよう」

この件については、余計な事情を挟まないためにも藤孝にやらせることにした。幕臣が直接出向き、やりとりをした方が相手の感情を刺激しないだけ和睦はまとまり易いだろうと思われた。

（されど、若狭を手に入れたとしても兵が足りぬ。左衛門督も思ったほど頼りにならぬし、やはり頼りにすべきは……）

義輝は静かに目を瞑った。脳裏に思い浮かべたのは二人の人物だった。

【続く】

第四幕　越前朝倉　―一乗谷評定―（後書き）

第四回です。

ここまで順調に書き上がりました。このペースを続けたいところです。

また今回まで義輝の呼称が様々で分かり辛いと思います。（そうでもない？）

上様：直臣（藤孝）や守護大名クラス（義景）
公方様（義輝公）：陪臣（光秀や朝倉家臣）
大樹公：身分に関係のない者（卜伝など）

という分け方にしています。（ただ信綱の場合、武家に仕えていた名残で公方と呼称しています）ま、雰囲気で変える場面もありますが…

※追記
初投稿作品で使い方に慣れず、タイトルが分かりづらく（第三回なのに二幕とか）なっていたのを修正しました。

第五幕　希望　―上洛への道―

越前一乗谷。
評定は未だ続いていた。

「上洛するとなれば、やはり六角殿へ支援を頼むべきであろう」
「されど六角と浅井は敵対しておるぞ」
「そこは公方様に取りなして頂くしかあるまい」

話題は六角家についてだった。

湖西を通るにしろ、湖東を通るにしろ上洛を目指すならば必ず六角領を通ることになる。そのためには江南に勢力をもつ六角家の支援は不可欠である。しかし、朝倉の家臣たちが考えるほど義輝は六角承偵を頼りとはしていなかった。

六角家はそもそもずっと義輝方として三好家と戦い続けており、江南では今でも大きな勢力を誇っている。義輝方の最有力と言っても過言ではない。それは間違いない。それなのに、なぜ義輝は六角に期待していないのか。その原因はこれまでの経緯にあった。

六角承偵は何度か三好家に勝っている。永禄元年（１５５８）に義輝が帰洛を果たしたのは承偵の御陰であると言えるし、教興寺合戦の前哨戦である将軍地蔵山の合戦では三好方に勝利し、久米田合戦では長慶がもっとも信頼する実弟・三好義賢を討ち取っている。しかし、何故か承偵はその後に軍勢の動きを鈍らせ、最終的に教興寺合戦で義輝方（六角・畠山連合軍）は敗北し、三好の天下を決定づけた。

（ここ一番であやつは頼りにならぬ）

もし教興寺合戦で承偵が畠山軍支援に動いていたら、そう思わなかったことはなかった。

「その話はもうよい。承偵には遣いを出す。兵を出すとなれば申し分ないが、領地の通行を認めるだけでも構わぬ」

堂々巡りの議論をここで続けていても埒はないと思った義輝は、決定を下した。

「されど上様。六角殿の支援なくば三好の兵を上回ること叶いませぬ」

藤孝の指摘通りだった。

皆の脳裏には、朝倉・浅井で二万。若狭勢が三千。これに六角勢を加えることによって三好に対抗できると考えている。

「分かっておる。されど、当てがないわけではあるまい」

「と、仰いますと？」

「ほれ。朽木谷で明智が申しておっただろうが」

「まさか……上杉！？」

上杉の名が出ると、場がどよめいた。上杉の名は、朝倉家中でもよく知られている。朝倉にとって正式な同盟国は浅井家だけだが、上杉家とは加賀を中心に勢力を有する一向一揆との戦で何度も連携している。また永禄二年（１５５９）に上杉輝虎が上洛した際には北陸道を通っており、領地の通行許可を与えた朝倉家へ礼を言うため一乗谷も訪れていた。

「されど上杉様は越後。上方まで来られるかどうか……」
「無理は承知じゃ。輝虎も余が任じた関東管領職を全うするため、信濃や関東へと忙しく働いておろう。そんな輝虎に頼むが心苦しくはあるが、余の苦境を訴えるしかあるまい。あの折と同じく、五千でも構わぬ。強兵たる越後兵ならば、万騎に値しよう」

この発言には義景を含め、朝倉家臣は驚いた。義輝は輝虎へ対し『上洛して来い』と命じるのではなく、『来て欲しい』と頼むのだという。これほどまでに将軍が臣下の者に謙ることは珍しい。正直、義景としてもこの自家との扱いの差はいい気はしなかった。

本来ならば義輝にとってここで義景の機嫌を損ねることは良いことではないのだが、無視した。どうせ今のままでは上洛は叶わない。それよりは他を特別扱いしているところを見せ、奮起してくれた方がいい、と。

だが問題は誰を遣わすかだった。上杉家との連絡役は大館晴光が務めていたが、先月に亡くなっていた。また他の幕臣たちは多くが二条御所で討ち死にしたか、離散しているために今は藤孝しかいない。この地で待っていれば誰かしら帰参してくるだろうが、誰がいつ来るか分からないのを待っていても仕方がない。

そんな義輝の心中を察したのか、今まで沈黙を守っていた信綱が志願を申し出た。

「儂が越後へ参りましょう」
「勢州殿が？」

信綱は本来、最後まで何も発言しないつもりだった。そもそも幕臣

でもない自分がこの場にいることが相応しいとは思っていないのだ。しかし、あまりにも義輝側の人間が少ないので藤孝から評定への参加を要請され、末席から評定の行方を見守っていた。

「管領様とは関東出陣の折、面識がございます。それに関東へ出馬されているやもしれませぬからな。関東であれば、儂は地理にも明るうござる」

信綱は元々関東管領・山内上杉家の重臣長野家に仕えていた。長野家は上杉家を継いだ輝虎にも従っており、永禄三年（１５６０）の関東出陣では長野家も輝虎に従っており、剣豪としても長野十六槍としても武名を轟かせていた信綱は輝虎の目に止まっていた。翌年に小田原城を攻めて鶴岡八幡宮で関東管領に就任し、越後へ戻るまで何度か信綱は輝虎と酒を酌み交わし、太刀合いも行った。

「勢州殿であれば申し分ない。是非にも」

「合い分かった。されど儂も何度も越後との間を往来するわけには参りませぬぞ。後任は、定めておいて頂きたい」

「承知した」

こうして上杉輝虎の許へは信綱が派遣されることになった。後は輝虎の動向次第で上洛時期を定め、上方にいる反三好の勢力に声をかけるだけ。そう誰もが思った。義輝以外は……

「もう一人、声をかけておきたい者がおる。輝虎が上洛できぬとも、こやつが味方となれば三好を討ち破れるやも知れぬ」

「はて？何処の大名ですかな」

「誰もわからぬか？」

皆が考え込む。関東管領たる上杉の代わりになるような大名。義輝

の口振りからすると、こちらと軍勢を合流できる大名に思えるが、甲斐の武田に駿河の今川、西国の毛利と名が上がるがいずれも上洛軍を起こせるような者たちではない。結局、誰も答えを見つける事が出来ず、義輝が口を開いた。

「織田、信長よ」

「の…信長！？」

意外な名前に皆が驚き、様々な反応を見せるが、中でも義景が一瞬だけ露骨に嫌そうな顔をしたのを義輝は見逃さなかった。

「左衛門督。何ぞあるか？」

「いえ、織田など頼りにならぬかと思いまして…」

「余は一度、上総介（信長）に会ったが、なかなかの大将であったぞ」

永禄二年（１５５９）。この年の初めに義輝は全国の諸大名に上洛を命じた。表向きは義輝の帰洛を祝うものであったが、その実が打倒三好であったことは改めて言うまでもない。そして真っ先に上洛してきたのが尾張の織田信長だった。この事を義輝は評価しているのだ。ちなみにその次に上洛してきたのが当時長尾景虎と称していた上杉輝虎である。

一方で義景は信長が嫌いだった。かといって、二人は会ったことがあるわけではない。不満の原因は、朝倉家と織田家の出自にあった。両家の共通点は共に斯波家の家臣だったこと。朝倉家は斯波家が守護を務める越前の守護代であり、織田家は尾張の守護代である。しかし、義景は守護代の家系だが信長は守護代家老の家系だった。よって信長の方が一段格下となる。ただ信長側にも言い分はある。朝

倉家は応仁の乱の時、主家である斯波家を裏切って越前守護へ昇格したが、織田家は尾張で斯波家を支え続けた。なので勝手に格下にされる云われはないが、自分が上と思っている義景にはその理屈は通じない。

だが義景が信長をどう思おうが、今の信長は尾張一国に伊勢と美濃の一部を領している。上洛してきたときは未知の武将だったが、翌年に桶狭間で東海三カ国を治める今川治部大輔義元率いる軍勢を寡兵にて討ち破ったことによりその将器が本物であることが証明されている。無視できない勢力だ。

「織田家であれば、某を御遣わし下さい。必ずや御味方に引き入れて御覧に入れまする」

「明智か」

義輝との連絡役を務めていた光秀も、この場に参加している。しかし信綱とは違う理由、客分という身分の低さから今まで一切発言をしていなかった。義輝はその光秀が突然に織田家との使者へ志願してきた理由を掴みかねた。

「織田様の御正室・帰蝶様と某は従兄妹同士でありますれば…」

「なんと！？」

これには義輝はもちろんのこと、朝倉の者たちも驚いた。義景なぞは『そのようなこと聞いておらぬぞ』と心の中で叫んでいることだろう。

（こやつ……左様な奇縁を持っておったか）

光秀のことを義輝は元々それなりの武家の出だろうと思っていたが、

大名の正室と血縁関係にあるほどだとは思わなかった。そもそもそんな者が、光秀ほどの才を持つ者が何故いつまでも客分のままなのか。

（余ならばすぐにでも直臣として召し抱えるが、左衛門督はとんだ阿呆じゃ）

この時、義輝は初めて光秀が欲しいと思った。

「ならば明智、許す。そちが使者を務めい」

「されば公方様に御許し頂きたいことがございます」

「なんじゃ」

「場合によっては美濃守護職、織田様に任せること御許し下さい」

「ふむ…」

悪い手ではない、と義輝は思った。既に尾張の支配権は信長に認めており、織田家は将軍公認の守護大名である。一方で美濃を領す斎藤龍興も父・義龍の頃に認められて相伴衆に列している。

（最良なのは余の調停の許で両者が和解し、共に上洛軍を発してくれることだが…）

そう都合良くいくことなど考えない方がいいと義輝は思った。あまりにも虫が良すぎる。ならば一方に濃尾を任せるしかない。上洛後、濃尾にまとまった義輝方の勢力があれば強力な後ろ盾になることも考えられた。

（斎藤龍興は酒色に耽り、家臣の竹中某に居城を追われたと聞く。そんな男に美濃を任せるよりは……）

義輝も認めた先代の義龍が生きていれば違ったかも知れないが、信長と龍興では圧倒的に器が違いすぎた。

「よい、許す。一切を明智に任せる故、必ずや織田を余の味方に引き込めい」

「ははっ！」

平伏する光秀。そこに反応したように義景が飛び出てくる。

「お…お待ち下され！」

「なんじゃ、左衛門督」

「軽々しく守護職を任せるものではありませぬ。織田風情に守護は荷が重うございます」

嫉妬、妬み、そういったものが義景の中を支配していた。が、義輝はそんなものに目もくれず…

「不服か。そなた家臣とて、先ほど軽々しく加賀守護に任じて欲しいと願い出て参ったではないか」

「そ…それは……」

義景がキッと景鏡を睨み付ける。一方で景鏡もばつを悪そうに目を逸らしている。

「それに必ずしも上総介に美濃守護を任せるという話ではない。明智も場合によっては、と申しておろう。そうであるな、明智よ」

「はっ。美濃守護職はあくまで織田様を御味方に取り込むため、交渉の材料にしたく申したまでにございます」

「だ、そうだ」

「そ…それならば構いませぬが……」

納得したようでしていない義景が渋々引き下がる。その姿を見て、義輝は改めて義景を頼りなく思った。

（もっともそんな手に乗ってくるほど上総介は阿呆ではあるまい）

そんな浅はかな男ならば、初めから頼りになるわけがない。恐らく織田上総介という男は、そんなに甘くはないはずだ。それに頼りになる男なら、方便でなく本当に美濃守護を任せてもいいと義輝は思っていた。

（輝虎と信長……余の命運はあやつらに懸かっておるのやもしれぬな）

義輝はかつて一度だけ会った男たちの顔を思い出していた。

そして評定が終わった。

【続く】

第五幕　希望　―上洛への道―（後書き）

少し間が空きました第五幕です。

次回は序章最終幕。今回の話にあった信長と謙信が登場します。

第六幕　将星二つ　ー軍神と大うつけー

六月二日。
尾張国・小牧山城

尾張の国府である清洲より東北にある小牧山に築かれた城はその山全体を城郭と化しており、多数の曲輪が点在、配下の将の屋敷が建ち並び、南西一帯には城下町も形成されている。主力の兵も置いており、凡そ二年前に築かれたとは思えないほどの賑わいがあった。信長の美濃経略における最前線基地とした意気込みが感じられる。実際、美濃斎藤家の本拠たる稲葉山城とは僅か四里（１６ｋｍ）ほどしか離れておらず、敵対勢力同士の本拠地がこれほど近いのは異例だった。

その地に、大うつけと呼ばれた織田上総介信長はいる。

「御屋形様。明智十兵衛と名乗る者が目通りを求めております」
「明智…とな？」
「はっ。何でも帰蝶様に縁がある者とか。追い返しましょうか？」
「いや、よい。すぐにこちらへ通せ。それと於濃（帰蝶）も呼べ。身内とならば、会いたかろう」

信長は簡単に目通りを許した。自身の室のことを思ってではない。帰蝶の縁者となれば美濃の出身、美濃攻略に有益な情報が得られるかもしれないと考えたからだ。

小姓は信長の前から下がると、先に入ってきたのは帰蝶だった。

「殿。十兵衛殿が参られたとか？」

「うむ。間もなく参るであろう。そちの縁者と聞いた」
「はい。我が母の甥に当たる方です。私が殿の許へ嫁ぐ前までは稲葉山のお城で何度か会ったことがございます」
「で、あるか」

帰蝶の母、つまりは斎藤道三の正室は小見の方と言い、光秀の父である明智光綱は兄に当たる。ちなみに両者とも死没している。

「御屋形様。明智殿を御連れしました」
「入れ」

襖がサッと開けられる。その先に平伏する一人の男へ信長の視線は送られる。

「明智十兵衛光秀にございます」
「で、あるか」

たったそれだけで両者の挨拶は終わる。信長は何も話さない。それだけだったにも関わらず、光秀の額には冷や汗が滲み出ていた。鋭い眼光を叩きつけられている。部屋中の空気が張り付き、凝縮するような感覚だけがヒシヒシと伝わってくる。

（な…なんだ、この威圧感は……）

それが、光秀の抱く信長の第一印象だった。言葉が詰まっている光秀を案じ、帰蝶が助け船を出した。

「十兵衛殿。長良川の合戦の折、一家が離散したと聞き案じておりました。こうして再びお会いできたこと、嬉しゅうございますよ」
「は…はっ。帰蝶様も御健勝のようで何よりにございます」

その時、光秀は初めて帰蝶がいることを知った。正直、声をかけてくれたことを感謝した。見知った人間の声を聞いたことで少し緊張が解れた光秀はようやく話に入ることが出来た。

「此度は将軍家の使者としてまかり越した次第にございます」

「将軍家とな？……義輝公は御健在ということか」

信長がこう思うのも、巷では義輝は三好・松永に暗殺されたという噂が蔓延していたからだった。光秀も道中でそれを聞き、知っている。ただ余りにも噂の広がり方が異常なので信長自身は真偽を掴みかねていた。

「義輝公は兵を求めておられるのか」

「はっ」

いきなり本題を突かれた光秀は驚いたが、話が早くて助かるとも思った。信長としては義輝が生きていて自分に使者を送ったという事実から導き出した発言に過ぎず、無駄な問答を省いただけだった。

「公方様は越前におられます。近く上洛し、逆賊を討ち平らげる所存なれば、織田様にも逆賊征討の軍へ加わわらることを望んでおられます」

「当家は今、美濃攻めの真っ最中である」

信長は兵を出せる出せないとは言わず、織田家の現状を語った。これが断り文句であることくらい光秀も分かる。しかし使者を務めると己で言い出した以上は、簡単に引き下がる訳にはいかない。

「斎藤家との和睦、公方様が取りなしても構わないと申しておりま

す」

和睦のことは義輝と話してはいない光秀だったが、一切を任せると言われている以上は許容の範囲と捉えている。しかし、信長は和睦の提案を即座に拒否した。

「何故にございますか？」

「そなたも蝮殿（斎藤道三）に仕えていたのなら知っておろう。美濃は蝮殿より儂に譲られておる。龍興は不当にも美濃を占拠した義龍が子、また仇だ」

道三が長良川合戦で実子・義龍に敗れて自害する寸前、女婿の信長へ“美濃を譲る”という遺言を書き残した。それが信長の美濃攻略の大義名分でもあるし、そのために信長は広くそれを流布させた。そのために光秀もこのことは知っている。

「そこを曲げては頂けませぬでしょうか。公方様のことは、天下の大事にございます」

信長が美濃攻めに拘る気持ちは光秀にも分かる。光秀としても道三を慕っていたのだから、龍興は美濃国主に相応しくないと思っている。ただ、だからと言って光秀も引き下がるわけにはいかない。信長に何とか考え直して貰おうと必死に説得を続けるが。

「明智とやら。貴様は岳父の仇討ちを小事と申すか」

「い、いえ…そのようなつもりは……！？」

即座に平伏し、謝罪する。だが怒ったかに見えた信長の傍らで帰蝶が二人のやり取りを見て『くすくす』と楽しそうに笑って見ていた。

「殿。十兵衛殿をからかうのはその辺にしたら如何です？」

信長に嫁いで十六年。織田三郎信長の人となりを帰蝶は承知している。世間で言われている以上に気むずかしい人物であるが、岳父・道三を尊敬している。ただけして仇討ちなどに囚われる人物ではない。何事も合理的に動く人物だ。美濃を獲るために信長が道三の仇討ちを利用していることを帰蝶は知っているし、美濃を獲るのは上洛をするためとも知っている。

「わかった、わかった。明智とやら、儂は三好・松永なぞに与する気はない。義輝公に御味方仕ると伝えてくれ」

「有り難き御言葉、しかと公方様へ御伝え致します」

初めは難航すると思われた交渉が、帰蝶の御陰で意外にも簡単に進んだ。もはや頼れるものはないと考えていた自身の縁にこれほど感謝したことはない。しかし、光秀は戦国武将のしたたかなる一面を承知している。未だ信長から“兵を出す”との言葉が告げられていないことを忘れてはいない。

「つまり兵を出して頂けると考えて宜しゅうございますか」

「構わぬ」

だがこれも簡単に目的の言葉を引き出せた。どうやら織田信長という男、根は単純なようだ。しかし、まだ引き下がるわけにはいかない。ただ兵を出すだけでは、数百でも一千でも兵を出したことになるからだ。実際にそうやって約束を守ったことにする大名もいた。それでは何の意味も無い。

「されば兵一万を御願い申し上げます」

兵数を指定するということは臣下の者へ対する扱い方であるが、あくまで自身は将軍の使者であるので失礼には当たらないと光秀は考えている。それに織田家なら一万ほどは軽く出せる力を有しているし、一万は出して貰わなければ三好の兵力を上回ることは出来ない。

しかし、これに信長は難色を示した。

「当家の事情は知っておろう。兵数の約束まで出来ると思うてか」
「承知しております。されど御約束を頂ければ、公方様も御安心召されるかと」
「義輝公へ嘘は申せぬ」
「ならば御家の御事情が変われば、如何でしょうや」
「なに？」

信長が意味深な光秀の発言に身を僅かに前のめりにさせている。それを光秀は見逃さなかった。興味を持っている証拠だ。

「美濃守護職。公方様は織田様に任せてもよい、と申しております」
「それはまことか」
「越前を発つ前、しかと承っております」
「書付はあるか？」
「今はございませぬ。されど織田様が御望みであれば、すぐにでも公方様より頂いて参りましょう」

光秀は完全に信長が餌に食らいついたと思った。書付とは、いわゆる証文である。それを要求するということは、完全にこちらの掌に乗ったと考えていい。だが……

「よい。義輝公の御心は伝わった。それに儂は美濃守護になぞなるつもりはない」

「……は？」

光秀は理解できなかった。守護職は美濃攻めにおいて道三の遺言状以上に確実な大義名分になるはずだった。何せ道三がいくら信長に『美濃を譲る』と言い残したとはいえ、道三自身は美濃守護ではない。守護職は子の義龍が本来の守護・土岐氏を称することで継承している。つまり表向き正当な美濃国主は義龍の子である龍興の方なのだ。

それを覆すのが、今回の裁定であった。元々守護職を交渉の材料にする気だった光秀だが、こうも拒否されるとは思っていなかった。

「いま義輝公より守護職を賜ったとしても、名のみであり実が伴わぬ。それでは当家の力を義輝公に認めては貰えまい。美濃平定は当家の力のみで行う。義輝公の力は借りぬ」

「さ…されど、それでは美濃平定に時間がかかりましょう。公方様の上洛に間に合いませぬ」

「兵は出すと申した。それでよかろう。下がって義輝公へ伝えるがよい」

それを最後に光秀は有無を言わさずに閉め出された。あっという間の出来事だった。

渋々光秀は越前へ戻るしかなかった。幸い、信長との面談は四半時（３０分）もかかっていないため、その日の内に小牧山を発つことが出来た。

だが一方の信長はこれを機に忙しく動き始める。先ほどまで光秀が座っていた場所に、柴田権六勝家、林佐渡守秀貞、丹羽五郎左衛門尉長秀、木下藤吉郎秀吉が座っていた。

「先ほど将軍家より使者が参り、儂に上洛を求めてきた」
四人から『おぉ』と感嘆の声が漏れる。それほどまで彼らにとって上洛は特別なことを意味していた。
「さらには儂を美濃守護に、と申してきたが、それは断った」
ここで信長の家臣たちは『何故か』と訊ねるような真似はしない。ただ黙って信長の意を受ける。それが織田家の常識だった。
「が、その話は使える。…五郎左」
「はっ」
「この話を聞けば、加治田衆は落ちるか？」
「確実に落ちまする」
中濃一帯に勢力を有する加治田衆は佐藤忠能を盟主とする土豪たちである。信長の命を受けて長秀が調略を仕掛けていた。
「権六、兵を整えよ」
「美濃攻めですな。腕がなるわい！」
勝家が握り拳を左掌に叩きつけ、闘志を湧き上がらせる。
「猿（秀吉）。その話を美濃中にばらまけ」
「はっ。同時に西美濃衆を斎藤家より切り離しまする」
「ふっ…ようわかっておる」
信長は顎髭を擦りながら、満足そうに頷いた。秀吉のこういう切れるところを信長は買っているのだ。

「中濃が落ち、西美濃衆が儂に従えば、東濃は自ずと靡く」
「美濃平定は成ったも同然ですな。わっはっはっは！」

秀吉が馬鹿笑いを始める。他の三人は苦々しくそれを見ているが、この話自体は織田家にとって悪い話ではないのでそれを咎めるような真似はしない。

「佐渡。熱田、津島の商人共に命じ、上洛の仕度に取りかかれ」
「い…今すぐにでございますか！？」

秀貞が驚くのも無理はない。あくまで上洛は美濃攻めが終わった後のことだと考えていたからだ。それは間違っていない。

「当たり前であろうが。でなければこの場にそちを呼んだりはせぬ！」

そう言い放つと、信長は部屋から出て行ってしまった。残された四人は、後は信長からの命令を従順に実行するしかない。

そして十日後。加治田衆が織田家へ通じた。これに怒った斎藤方が兵を出してきたが、織田軍の前に敗走し、中濃一帯は織田方となった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

六月七日。
越後国・春日山城

日本海に面するこの山城は関東管領の御城である。主たる上杉弾正少弼輝虎は去る三月に北条相模守氏康に攻められて窮地に陥っている関宿城主・梁田晴助を救援するために関東入りしていたが、輝虎が下総国へ入ると東関東の諸侯がこれに合流、梁田勢の士気も上がり奇襲を仕掛けてきた。流石の氏康も果敢徹せず、上杉本隊とは戦わずに兵を引いた。

救援に成功した輝虎は今月の初めに春日山に戻ってきた。そして、将軍・義輝の死を報されたのである。それから義輝の御霊を弔うため、毘沙門堂へ籠もっていた。とは言っても義輝は死んではいない。京での変事が関東へ届く頃には尾ひれが付いて死んだことになっていたのだ。

（逆賊共に上様が……やはりあの時、奴らを成敗しておくべきだった）

輝虎は振り返る。永禄二年（１５５９）に上洛した時のことを。

あの上洛の目的は、表向き上杉の家督相続と関東管領就任の認可を得ることだったが、実際は三好長慶を討って義輝を扶（たす）けることにあった。その為の、兵五千だったのだ。

義輝の周辺を取り巻く情勢は厳しいものだったが、六角や畠山など反三好勢力の力も衰えておらず、輝虎は勝機を感じていた。しかし、義輝からすれば上杉勢五千が加わったところで勝ちを得るのは難しいと判断しており、三好討伐の許可を与えなかった。

（上様の命令を無視してでも実力行使に及ぶべきだった……）

と、義輝の死を報された輝虎は悔やむしかなかった。そこへ小姓か

ら来客の報せが入る。

「御実城様」

「何用か。ここへは入るなと申し付けておったはずだが」

怒気を滲ませ、小姓を咎める。輝虎にとって毘沙門堂での祈りは神聖なものであり、何人たりとも邪魔は赦さなかった。家臣たちにもそう言いつけてある。故に咎めている。

「そ…それは重々承知にございますが…、上泉伊勢守様が目通りを願っておりますれば……」

「勢州が…か？」

珍しい、と輝虎は思った。

信綱は先代の長野家当主・業正が死去して後、主家を致仕していた。“郎党のみを連れ、諸国放浪の旅に出る”と春日山に挨拶に来た信綱本人から聞いている。それ以来、輝虎は信綱と会っていない。

しかし、すぐに会うかどうか迷った。実際、今は義輝の御霊を弔う祈りを捧げているところである。何よりも神聖で、大事な儀式だ。

しかし小姓は主君の傍近くに寄り、耳打ちした。

「伊勢守様はどうやら、上方から参られたようにございます」

「なに！？」

思わず声を上げてしまった輝虎が、小姓は構わず続ける。

「公方様のことについて、急ぎ御実城様に御伝えしたいことがある

とのこと」
「…すぐに会う」
と言って毘沙門堂を出た。
半刻（1時間）後、四年振りの輝虎と信綱の対面となった。現れた信綱は以前と変わらぬ姿であった。
「久方振りじゃ。勢州よ」
「管領様も御健勝で何より……」
「上方より参ったと聞いたが？」
「はい。つい先日までおりました」
「上様が亡くなられたと聞いた。嘆かわしいことじゃ。何でも勢州は上様がことで儂に伝えたいことがあるとか」
「左様にございますが、その前に一つ訂正がございます」
「訂正？」
「公方様は御健在であらせられます」
「ま…まことか！？」
義輝の生存。それは衝撃だったが、まずは無事を喜んだ。何よりも輝虎にとって足利義輝という人物は、聡明かつ勇猛さを兼ね揃え、覇気に溢れた希有な存在。己の思い描く征夷大将軍そのものであり、乱れた秩序を取り戻す唯一の希望だったからだ。
「今は窮地を脱し、越前へ身を寄せられております」
「越前……左衛門督殿のところか。ならば安心じゃ」
越前朝倉は上杉家にとって好意的な相手であるため、輝虎は心から安堵した。

「此度、その公方様に頼まれて管領様の許へ参った次第」
「将軍家よりの使者……と申されるか」
「…そうなりますな」

ならば、として輝虎は立ち上がり、座を信綱に明け渡そうとする。信綱が将軍家の使者であるのなら立場上で上司ということになるため、上座を明け渡し、下座より上様の御言葉を賜らなければならない。

しかし、信綱は首を横に振ってそれを拒否した。

「此度は公方様より命令を受けて参ったのではございませぬ。あくまでも依頼で参ったのです」
「はて？」

輝虎は臣下なのだから、命令すればいいだけのことである。そこら辺が輝虎には理解できずにいた。しかし、信綱は構わず続けた。

「公方様は逆賊の討伐を御望みです」
「で、あろう。三好・松永らの所行、赦されるものではない」
「そのため、管領様に上洛を求めておられます」
「……」

輝虎は目を瞑った。

長慶を失ったとはいえど三好・松永らの力は侮れない。朝倉という新たな味方を手に入られたとはいえ、教興寺合戦の結果、上方に残る反三好勢力の力が弱まっており、義輝が自分の力を必要とするのは己でも理解できる。

「されど勢州よ。関東での争乱、日々激しくなっておる。先日も甲斐の武田信玄が西上野へ迫っておるとの報知を受けた。近々また関東へ出陣するつもりじゃ。とても儂が離れられる状況ではない」

現在の関東は予断を許さない状況が続いていた。

関東制覇を狙う北条氏康はもちろんのこと、その盟友・武田信玄も輝虎が越後へ帰る度に兵を入れている。そして輝虎が関東へ赴くと撤退し、また兵を出すというイタチごっこが続いていた。

「分かっております。故に公方様は、これは命令ではなく『頼み』だと仰いました」

「上様が儂に頼む…と？」

「はい」

痛かった。主君に“頼み”と言わせている自分の胸がただただ痛かった。そして主君の窮地に駆けつけることの出来ない己の不甲斐なさを罵った。

「管領様。公方様は以前と同じく五千の兵でも構わない、と仰せです。それであっても上洛することは叶いませぬのか？」

信綱は率直な疑問をぶつけてみる。数年前までの関東の情勢は知っているが、ここ一、二年のことは諸国を放浪しており断片的にしか知らない。だが上杉家の最大動員数は二万を越えるはず。多くの守備兵を残していれば上洛は可能ではないかと考える。

「その程度であれば出来なくはないが……」

輝虎は迷っていた。

武蔵国の大半は北条家に奪われたままだが、上野、下野、下総、常陸、上総、安房と反北条の勢力が中心に活気づいている。急先鋒たる佐竹右京大夫義昭も常陸を統一する勢いだし、前年に国府台で北条に破れた里見刑部少輔義堯も未だ勢力を保っている。

自分が離れるという不安があるが、信綱の言うとおり五千程度なら上洛させる余裕がないわけではなかった。しかし、同時に五千を上洛させたところで、と思うところもある。充分に役に立つ自信はあるが、関東管領たるものとして、万余の兵を率いていきたい気持ちが強い。

「管領様。先の変事で生き長らえた後、公方様は死のうとなされたことがある」

「は？」

唐突に話を始める信綱に戸惑う輝虎。だが話の内容が内容だけに黙って聞く。

「妻子を、母御を殺されたのじゃ。無理もござらん」

「……」

「管領様には妻子はおらずとも、母御はおりましょう。その無念、如何ばかりのものか御分かりになりましょう」

「……」

「妻子とはあの世で会おうと約束までしたらしい。母御ともな。だが公方様は生きた。生きてしまった。儂らが御助けした所為だが、公方様はそれを恥じた」

「……」

「恥じたからこそ、朽木谷の城で三好の軍勢が迫って来たとき、逃げる術があったにも関わらずに公方様は城を枕に討ち死にする覚悟

であった。されど、また生きた」
「それは何故？」
「側近の細川兵部が説得した、明智十兵衛なる者もな。されど本音の部分は知りませぬ。公方様に直に会い、聞かれたらよい」
悲しい話だった。もし自分が同じ立場だったらどうしただろう。妻子を失う気持ちは分からないが、もし母が自分の家臣の手に掛かって死んだとしたら…、恐らく自分は怒り狂い、何人の制止も振り切りその者を八つ裂きにするだろう。それが叶わぬなら、助けられなかった己を恥じて死を選ぶ。そうするかもしれない。
（上様はそのような苦悩を抱えておられるのか……）
輝虎は胸に熱いものが広がっていくのを感じた。そして己を恥た。関東管領として万余を率いて駆けつけたいと考えた己の見栄を。甘さを。
自分に言い聞かせる。『もう結論は出ているのではないか』と。
「上洛しよう」
輝虎の決心は固まった。
「まことで？」
「うむ。されど時期は当家の都合に合わせて貰いたい」
「それで、時節はいつ？」
「雪が降り始めれば、甲斐の武田も動けぬ。それまでに関東へ兵を送っておれば、北条輩も好き勝手は出来まい」
「となれば、十月の末辺りで？」
「一乗谷で御会い致しましょう、と上様に伝えてくれ」

「しかと、伝えましょう」
「…ああ、それと」
思い出したように輝虎が付け加える。
「一向一揆との和睦、上様に調停を依頼したい。どうやら裏から信玄めが手を引いているようなのだ。あれらに邪魔されたら堪らぬ」
「それならば、既に細川兵部が動いております。御安心を」
「それは重畳。もっとも、邪魔されたところで薙ぎ払うだけだがな」
「管領様なら造作もありますまい」
「当たり前じゃ」
二人が微笑み合わすことにより、この会見は終わった。
こうして上杉輝虎の上洛が決まった。
織田信長と上杉輝虎……戦国の世に生まれ出し二人の将星が、将軍・義輝の馬前で轡（くつわ）を並べる時が、刻一刻と近づいていた。
上洛の時は近い……
【続く】

第六幕　将星二つ　ー軍神と大うつけー（後書き）

序章最終幕です。のでいつもよりちょっと長くなりました。

序章を書き終えるまで、かなりかかったように思います。これではこのお話を書き終えるのがいつになるのやら……

とは言っても次章の上洛編やその次、最初の方に書いたと思いますが、シナリオはほぼ出来上がっており問題は私の根気のみ。有り難いことに購読者も増えておりますし、感謝の一言です。頑張るしかありませんね。頑張ります。

また本編ですが、この辺りから歴史の針が史実より早く進み始めます。そして変化し始めます。引き続き寛大な御心を持って見て頂けると幸いでございます。

第一幕　傀儡将軍誕生　―梟雄・松永久秀―

六月五日。
越前国・一乗谷

義輝が京を追われて半月ばかりが過ぎ、初めて喜びを感じていた。尾張へ行っていた明智光秀が“織田信長参陣”の吉報と共に戻ってきたからだ。

「そうか、上総介（信長）が来てくれるか」

と喜色を浮かべる。光秀からの報告では信長は即座に自分の味方をすると表明したという。信長の勇気ある決断と忠節に感謝したいところだったが、何よりも信長が己の期待通りの人物であったことが嬉しかった。

「流石は上様にござる。後は上杉殿にございますな」

義輝と同じように喜びの表情を浮かべているのは、一色式部少輔藤長である。

義輝が越前へ移ってよりこれまで、僅かながら幕臣たちが駆けつけてきた。細川輝経、柳沢元政、上野清信、石谷頼辰、大館藤安、御牧景重らである。また覚慶のいる和田惟政の許にも何名か駆けつけているという報せが入っていた。

かといって彼らが今もここにいるわけではない。藤長以外は義輝の命を受けて各地へ飛んでいた。ただでさえ人材が枯渇している以上、彼らを遊ばせておく余裕はないのだ。

「しかし、左衛門督（朝倉義景）は悠長なものよの」
義輝が愚痴をこぼすのは隣から聞こえてくる慌ただしい音が原因だった。
「すぐに上洛する故に御所は無用と申したものを……」
安養寺の隣では義輝の新御所の建築が行われていた。しかし、義輝は事前にこれを断っている。だが義輝を保護する義景としては、立派な御所を建てなければ己の威信を世に示すことが出来ないので、どうしても御所は必要だった。故に理由を付けて建築を始めている。
「式部、若狭出兵の仕度は何処まで進んでおる？」
「はっ。今朝方に敦賀の景恒殿より報せが参り、まもなく仕度が整うので出迎えに参ります、とのことにございます」
「おう、まもなくか」
言葉に思わず力が入る。鬱憤が溜まっている義輝としては、暴れたくて仕方がないのだ。幸いにも朝倉家臣の中に中条流の富田勢源なる者がおり、新当流である義輝の評判を聞きつけて訪ねてきた。これがまた盲目の剣客ということもあって大いに義輝の興味を湧かせた。今では毎日のように打ち合い、精気を養っている。
（若狭などあっという間に平らげてくれる。そしてその後は……京よ！）
若狭出兵に熱い闘志を燃えたぎらせる義輝であったが、一方で全く気が付いていなかった。油断と言っていいだろう。どうやって三好・松永を討ち滅ぼすかに思慮が集中しており、自分を逃がした奴らが

どのように動いてくるかをまったく予想していなかったのだ。
義輝の去った京の都では、驚くべき策謀が既に動いていた。

＝＝

遡ること五月二十日。
上京・関白近衛前久邸

（何故この男がここにおる！）

それがこの邸宅の主・近衛前久が帰宅して最初の思ったことだった。
昨日、洛中では将軍・足利義輝が襲われるという事件が発生した。将軍の生死は不明、京の都は騒然としており、禁裏では緊急の朝議が招集された。前久もそれに参加して帰って来たばかりのところである。

「御待ち申しておりましたぞ、殿下」

居座る白髪の老体。まだ五十半ばらしいが、十は老けて見えるこの男を前久は知っていた。過去に義輝や三好長慶と会った際に何度か侍っていたのよく覚えている。それだけ印象深い男だった。しかし、実際にこうやって相対するのは初めてである。

「何故にこの者を通した！」

男を無視し、怒声を上げて家人を叱り上げる。家人は主の声の大きさに驚き、身を縮こまらせながら謝罪の言葉を口にするが、それで

も前久の怒りは収まらない。今にも腰刀を抜かんとする勢いである。この男、公家の頂点に立ちながらその振る舞いは武家そのものであり、言うなれば公家らしくないのだ。

「そう怒らぬで貰えませぬか。儂が勝手に上がり込んだだけのこと。その者は悪くありませぬ」

その勝手に上がり込んだ男は悪びれもなく家人を弁護するが、前久はそんな男をキッと睨み付けた。

「義輝殿を襲った者が、何用じゃ！」

「これは異な事を仰る。公方様を襲ったは手前ではござらぬぞ」

「しらばっくれるな！義輝殿を襲った軍勢は蔦紋を掲げておったらしいではないか」

「おおっ！流石は殿下、ようご存じで」

まるで他人事のように感心する男の態度に前久はさらに腹を立たせた。蔦紋は松永家の家紋であり、それを掲げる軍勢は松永家のものということになる。それが義輝の屋敷を襲ったのだから、犯人は目の前の男に他ならない。

「松永弾正！そちの仕業であろう！」

松永弾正少弼久秀。三好長慶の右筆から長慶の娘を娶って一門衆と同等の地位まで上り、今は若輩の主君を影で操る男の名である。その久秀が、変事の後に真っ先に訪ねたのが関白・近衛前久だった。

「これは大きな誤解があるようじゃ、殿下。公方様を襲ったのは手前ではございませぬぞ」

「偽りを申すな！」
「偽りではございませぬ。襲ったのは手前ではなく義久、我が子にございます」
「貴様の指図であろうがッ！」
人を小馬鹿にしたような態度で堂々と屁理屈をこねる久秀に前久は怒鳴り散らす。憤慨し、顔色を真っ赤に染め上げる。今にも頭の血管から血が吹き出そうなほどだ。
「公方様を殺めるなど、何と畏れ多い。天地神明に誓い、手前の指図ではございませぬぞ。その証に、我が手によって義久は捕縛いたしております」
「捕縛…じゃと！？」
「はい。今は三好下野守（政康）殿の屋敷にて蟄居させております」
この事自体は本当であった。主君の命（久秀の指示）により義久は蟄居処分を受けていた。しかし、理由が異なる。将軍弑逆を行った所為ではなく、実際はそれに失敗した為だ。だからといってそんな理屈が前久に通る訳もなく、前久は義久を打ち首にすべきと主張した。
「無論、そのつもりでおります」
飄々と久秀も前久の意見に同調する。これが前久の怒りに拍車をかける。久秀は先ほどからこの態度を崩ず、のらりくらりと前久の言をかわしている。
「ならば、帰って即刻打ち首にせい！」
「そうしたいのは山々なれど、それを決めるのは手前ではございませぬ」

「ならば、そちの主である左京大夫（三好義重）に打ち首にさせよ」
「公方様を殺めたのですぞ。我が主とて裁定を下すのは憚られましょう」
「では誰が処分を下すというのじゃ！」
「誰が…とは、殿下の御言葉とは思えませぬな。次の将軍に決まっておりましょう」
「つ…次の将軍……じゃと！？」

ここでようやく前久は久秀が自分を訪ねた理由を知ることになった。

（麿に新たな将軍を奏上せよというのか！？）

前久とて阿呆ではない。ここまで聞けば、久秀が何を考えているか分かる。久秀の許、つまりは三好方に十代将軍・義稙の子孫がいることは百も承知だ。関白……人民の最高位に座し、帝に奏上できる唯一の人間を久秀が訪ねた理由は明々白々。

そんな前久を無視するかの如く、久秀は一方的に話しを続ける。

「手前も義親公の命で公方様を御助けせんとしたのですが、不覚にも間に合わず。しかも公方様を襲ったのが我が子と聞き、胸が張り裂ける想いにございました。なれど御台様だけは何とか救出する事が叶い、これで何とか泉下の公方様へ顔向けが出来るというものにございます」

義輝の御台所。それは近衛植家の娘であり、前久の妹である。久秀がこのようなことを口にする意味はもはや語るまでもない。

（こやつ……麿を脅すつもりか）

前久の表情がみるみる変わっていく。怒りで赤かった顔が急に青醒める。

「いや、それにしても義親公。長年恨み積もった相手なれど、天下の秩序を保たんと将軍様を御守りせよとは、何と御心の深い御方か。この乱世、ああいう御方であればこそ鎮まろうというもの」

「義親を次の将軍とせよ、ということか」

「今日の殿下は勘違いが多いようじゃ。手前が次の将軍を定めるなど御門違いと申すもの。単に手前の印象を語っているだけございますぞ」

と言って久秀は笑い飛ばすが、これが恫喝であることは分かりきっている。

「義親公が次の将軍となれば、洛中の治安も即座に回復いたしましょう。それでこそ御台様も安心して実家へ御戻り頂けるというもの」

義親を次の将軍に据えろ、でなければ妹は返せない。それが久秀の要求だった。だが前久としても簡単に呑む訳にはいかない。目の前の男が将軍暗殺を指揮したことは明らか、そんな男の好き放題にやらせては今後、天下はどうなるか分かったものではない。

「殿下、天下の為にまずは次の将軍を定めることが大事でございますぞ」

と言い残し、久秀は去って行った。

久秀の姿が見えなくなると、前久は情けなくもガクッと肩を落とし、膝から崩れ落ちた。いくら抵抗しようとも、自らが取れる道が一つしかないことを理解しているからだ。しかも久秀は他の公家衆へも

近づいており、翌日になって宮中に戻った前久を待っていたのは『次の将軍は義親公しかおるまい』と何食わぬ顔で物言う同僚たちの姿だった。

（どいつもこいつも松永の走狗に成り果てよって！！）

しかし、その数日後に光明を差す報せが前久の許へ飛び込んできた。何と死んだと思われた義輝が越前へ逃れたというものだ。現将軍が健在なら後任を定める必要はなくなる。これを理由に前久は義親の征夷大将軍就任を断った。

「関白殿下とあろうものが取るに足らぬ噂を真に受けるものではございませぬぞ。それに噂が真であっても将軍職は京にあってこその将軍職。義輝公が戻られぬのなら次の将軍を定めるのみ。先例もございますぞ」

しかし、久秀は返答がすぐに届いた。しかも“明応の政変”を持ち出してだ。

明応二年（１４９３）、畠山基家討伐の為に河内へ出陣した時の将軍・足利義材（義稙）の留守を狙い、管領・細川政元が足利義澄を次代将軍に擁立して挙兵したことがあった。結果、義澄方が義材を追放して将軍職に就任した。

つまり、現在において洛中を支配している三好・松永は如何様にも将軍を擁立することが出来るという訳である。しかも困窮の極みにある公家どもを金品で籠絡することを容易いことだった。

前久は抵抗する術を失った。

そして六月九日のことである。三好・松永の軍勢に伴われて上洛してきた足利義親は従五位下に叙し、左馬頭に任官。名を義栄と改めた。翌十日に宿舎とした慈照寺にて勅使を受け、征夷大将軍職が宣下された。

足利幕府十四代将軍・足利義栄の誕生である。

栄えるとした自らの名が表しているのが松永久秀の栄華であろうことは、皮肉としか言いようがなかった。それを物語る出来事が、義栄が最初に出した命令であろう。将軍弑逆で蟄居している義久を赦免したのである。これに伴い、その主君であった三好義重は義継、義久は久通と改名し、これを義輝との離別の証とした。

一方で朝廷とて唯々諾々（いいだくだく）と従った訳ではなかった。義輝を討ち漏らしたことで三好・松永らが政治的に窮地に陥っていることを見抜いていた朝廷は、義栄に莫大な献金を要求したのだ。義栄側はこれを受け、五千貫を納めた。

この事を、義輝はまだ知らない。

【続く】

第一幕　傀儡将軍誕生　―梟雄・松永久秀―（後書き）

新章スタートです。

再び一幕となりますが、一応は十、二十となるよりは、章ごとに一から付けていきたいと思っています。

第二幕　若狭出兵　―義輝、猛る―

六月九日。

義輝は若狭の争乱を鎮めるべく、一乗谷を出陣した。

若狭は守護の武田義統が前守護の信豊と対立しており、守護方に朝倉、信豊方に三好・松永が介入し、度々戦闘が行われていた。現在は若狭の中央部を守護方、東部と西部を信豊方が抑えている状況となっている。特に東部を信豊方に抑えられているため、朝倉勢は上洛中に背後を脅かされるという恐れがあった。今回はその憂いを断つための出兵である。故に完全に若狭を抑える必要はなく、最悪でも東部一帯を平定してしまえば良かったのだが、可能なら若狭の兵を上洛軍へ加えたいと考えている義輝は、あくまでも若狭一国の平定を目指すつもりでいる。

「これが国吉城か」

「はっ。城主は栗屋越中にございます」

「栗屋越中か…」

栗屋越中守勝久。若狭西部を支配する逸見昌経と双璧を成す若狭武田氏の重臣である。この国吉城に拠って朝倉勢を何度も撃退した猛者であり、信豊方随一の戦巧者と言っても過言ではないだろう。小国若狭の地侍如きと侮っていた朝倉方も勝久に敗れて方針の転換を余儀なくされている。昨年、芳春寺に付城を築いて攻城の拠点とし、時間をかけて弱らせていく戦法を採っている。義輝たちはこの地に本陣を敷いた。

「国吉城は堅城。ここはじっくりと構え、まずは青田刈りを行うが

宜しいかと」

以前より何度も国吉城を攻めている朝倉軍の総帥・義景が義輝へ進言する。

（何がじっくりじゃ。いち早く上洛せねばらなんというのに）

義景の鈍重さに義輝は呆れかえっていた。

そもそも義景は一度も国吉城を攻めたことはない。若狭攻めは前敦賀郡司である景恒の兄・景？（かげみつ）が行ってきたことだ。故に景恒配下の者は国吉城に詳しいが、義景は国吉城を見ることすら初めてなのである。その義景の意見などまったく当てにはならない、と義輝は思っている。

しかし、一方で義景がいる利点もあった。

今回、義景が出陣したのは将軍である義輝が出陣するからであるが、当主自らの出陣ともあって本腰を入れたものとなっている。軍勢の数も一万五千を数えた。

（攻めても落ちぬ城など、攻めぬ方がよい）

上洛を前に中核となる朝倉勢に大きな損害を出すべきではない、と義輝は考えている。しかし、義景の出陣により軍勢の数が増えたことを活かせるのは何も城攻めにだけに限ったものではなく、特に将軍・義輝がいるという最大の利点もある。よって以前と同じ方法で攻めるのが愚策でしかない。

「畏れながら…」

ここで明智光秀が発言の許可を求めてくる。もちろん義輝はこれを許す。

「国吉城を攻める必要はないかと存じます」

光秀の進言は義輝の意に沿ったものであり、大いに関心を寄せるものだった。

「何故じゃ？」

「栗屋越中が信豊様方に付いたのは、守護の治部少輔（武田義統）様が当家を頼ったからだと聞いております」

「つまりは他家に頼る主に反発したと？」

「御意」

「さりとて前守護の信豊も三好・松永を頼っておろう」

「信豊様の方は逸見昌経の入れ知恵によるものにございます」

義輝の隣で聞いてる義景は光秀の言いたいことが掴みかねていた様だったが、義輝には何となく理解できた。光秀が言いたいのは、同じように見えて両者の立ち位置が異なる、ということだ。逸見昌経の場合は野心があってのことだろうから攻める必要があるが、栗屋勝久の場合は条件次第で降伏開城も有り得る。故に勝久を攻める必要はないと光秀は言っている。

「ではどうすれば良い」

義輝が訊ねる。そこまで言う以上、光秀には国吉城を開城させるだけの策がなければ意味はない。

「まずは後瀬山にて治部少輔様と合流し、先に逸見を攻めるべきか

と存じます。また丹波衆へ決起を促す御内書を発して頂ければと存じます」
「丹波衆へ決起？」
「信豊様方を支援しているのは丹波の内藤宗勝（松永久秀の実弟）にございますれば、介入を許せば若狭平定は長引くかと」

光秀の考えはこうだ。まずは若狭争乱の根源である逸見氏を討伐、それに際して三好方より援兵を送らせないために丹波衆を決起させて足止めさせる。逸見を討ち、義輝の命にて守護の義統の正当性を認めた上で朝倉勢が若狭から完全に撤退することを条件とすれば、勝久は城を開けるはずと読んでいる。しかし、この策の欠点は長年に亘って守護方を支援してきた朝倉家にまったく旨味がないことだ。現時点で義景が光秀の策を理解していれば、激怒しただろう。それが分かっているから、光秀は遠回しな言い方で義輝に進言しているのだ。聡明な義輝なら、理解するだろうと。

（されど、そなたはそれで良いのか？）
（大事は公方様の上洛にございます。今さら若狭などに構ってはおられませぬ）

目で会話する二人。物事の本質を見失なわず、将軍家第一に動く光秀に義輝は大いに満足した。

「治部少輔と会うならば余が出向かねばなるまい。左衛門督、余の供をせい」
「は…ははっ」

未だよく状況を掴めていない義景が反射的に返事をする。

「景恒。ここはそちに任せる」

「はっ」
「されど田畑を刈り、城方を刺激するような真似は致すな。城を囲み、動きを封じるだけでよい」
いずれ開城させる城、青田刈りなどを行って刺激すれば勝久は武辺の者だけに意地になって降伏を拒否する可能性があった。故にここは軽率そうな義景でなく、景恒に任せることにした。景恒であれば、家中を見返すために義輝に信頼を得たいと考えているため、命令に背くような真似はしないだろう。
「しかと承りました」
思った通り景恒は特に異を唱えることなく、命令を受けた。また義輝は光秀を残していくことにした。万が一にでも景恒が城方を刺激しそうなことをやろうとした場合、身体を張って止めるだろう。
「明智、そちも残り景恒を扶けよ」
「承知仕りました」
光秀も義輝の意を汲み取り、命令に従う。
さっそく義輝は義景と共に丹後街道を東へ進んだ。途中、信豊方の城がいくつかあったがの一万を越える朝倉勢を阻めるような軍勢はなく、義輝は難なく後瀬山城に入ることが出来た。そこで守護・武田義統の出迎えを受ける。
「上様、よく来てくれました」
この小国の守護は今年で初老（四十才）を迎えるが、立て続けの謀叛からの心労か、顔はやつれて頬は痩けており一回りは老けて見え

た。自分と似た境遇に同情を禁じ得ないのは相手も同じようで、己の苦境に駆けつけてくれた見知らぬ義兄に義統はただただ感謝し、涙した。

「朝倉殿もわざわざの御出馬、感謝致す」

「治部殿も儂が来たからにはもう安心じゃ。大船に乗った気でいるがよい」

この後、若狭から朝倉の影響が完全に取り払われるとは露とも知らない義景は、目の前で這いつくばる義統の態度に己の自尊心を刺激され、尊大に振る舞った。

「治部、さっそくだが逸見昌経は何処におる？」

「ここより東、二里半（約１０？）ほど行った高浜という地におります。新たに水軍を組織し、今年になって新城を築いております」

逸見昌経は四年前の戦いで守護の居館・後瀬山城を凌ぐとも言われた砕導山（さいちやま）城を朝倉軍に落とされており、新たな本拠とするべく高浜に築城を開始した。

ここで義輝は義統の“今年になって”という言葉が引っかかった。

「治部。今年になって城を築き始めたのならば、まだ完成しておらぬのではないか？」

今年はまだ六月に入ったばかりである。半年も過ぎていない。

「はっ。未だ普請中かと」

「ならば一気呵成に攻める！」

義輝は即断し、武田軍を加えた全軍に出陣を命じた。すぐさま軍令は全軍へ届けられ、若狭では類を見ないほどの大軍が西へ進む。

しかし、ここで大事件が起こった。

「義統殿は若狭守護にあらず！若狭守護はこの信方ぞ！」

突如、義統の弟である彦五郎信方が新保山城で挙兵、街道を封鎖して国吉城の景恒との連絡を断ったのである。しかも信方は己が若狭守護であると主張した。

「莫迦なことを……余が守護と認めたは治部少輔ぞ」

信方の抱える兵は少ないので一手を差し向ければ済む話として初めは軽く考えていた義輝だったが、続報が入ると軽視できない事態へと発展した。

なんと京にて足利義栄が征夷大将軍に就任、武田信方を若狭守護に任じたというのである。しかもそれを義統の父・信豊も認め、後見として新保山城へ入ったという。

「このッ！痴れ者共がぁぁぁ！！！！」

いきなり前将軍（さきのしょうぐん）にさせられた義輝の怒りは凄まじかった。愛刀・鬼丸国綱を引き抜くと手当たり次第に周りの物を斬りつけた。憤怒の表情で怒りを撒き散らす義輝の姿は阿修羅か仁王かと思われるほどの異形ぶりで、朝倉や武田の将たちは揃って義輝を畏怖した。

しばらく暴れた後、息を切らせた義輝が命令を下す。

「即刻、逸見を討てぃ！返す刀で信方も討つ！」
「はっ！！」

恐怖心に駆られ、朝倉・武田軍は一直線になって逸見昌経の高浜城を目指した。その行軍速度は速く、僅か一刻（2時間）で後瀬山から高浜までの距離を走破した。

「将軍が来た！？先に攻めるのは信方ではないのか！」

これに慌てたのが昌経である。

昌経は義輝を擁す朝倉勢を追い払うには三好・松永の援軍が必要と考えていた。これに自身の水軍と連携し、陸と海の二方面から反撃する。守護に仕立て上げた信方は謂わば援軍が到着するまでの時間稼ぎにするつもりだった。朝倉勢が若狭へ介入する大義名分は将軍・義輝と守護の義統がいればこそである。義栄が新たな将軍に就任し、信方を若狭守護としたならば大義名分は失われる。逆に守護職を得た信豊方に大義が生まれる。故に義輝が攻めるなら、その名分である信方をまず攻めると思っていた。

常の場合ならそうである。しかし、怒り猛った義輝は常ではない。いつでも始末できる信方は捨て置き、三好・松永と通じる昌経を攻めた。

先ほどまではどうやって朝倉勢を攻めようか考えていた昌経は高浜城を焼いて遁走した。未完成の城では防ぎきれないと考えたのだ。

しかし、怒る義輝は逸見勢の逃走を許さなかった。追撃に追撃を重ね、逃げる兵を追うに追った。奴らが逃げ込む先は分かっている。丹波の内藤宗勝のところだ。逃げる先が分かれば、追いかける方も

楽である。

結局、昌経だけは何とか丹波へ逃れることに成功したが、その手勢は壊滅した。残った諸城も開城し、西若狭が完全に義統に降った。

昌経がたった一日で敗北したことは信方の新保山城へも波及した。これに信方の家臣たちが三好方へ肩入れしたことを後悔し始めたのだ。

「今からでも遅くはありませぬ。兄君に降られませ」

と諫言する家臣たちだったが、今さら引けない信方はあくまでも抵抗の意思を示した。それは朝倉・武田の大軍が眼前に迫っても変わらなかった。それはそれで戦国の武将として信方の勇気を評せるところだが、家臣団は違った。

主を追ってでも、降伏するべきと考えたのだ。

翌日、信方と信豊の若狭追放を条件に新保山城は降伏。残るは栗屋勝久の国吉城だけとなった。

義輝が国吉城へ戻った頃には怒りも収まり、冷静に状況を把握できるまでになっていた。

（余が将軍でなくなった今、治部の正当性が失われた。栗屋越中が城を開くことは難しかろう）

と考えていたが、芳春寺に戻った義輝を待っていたのは予想もしない人物だった。なんと景恒の手引きで栗屋勝久本人が現れたのだ。

「御恥ずかしながら公方様へ弓を引いてしまいました。どうか御許し下さいませ」

目を丸くして驚く義輝。隣の義景も何が起こったのか分からないでいる。しかし、目の前にいるのは紛れもなく栗屋勝久である。

「実は……」

景恒が語る。

これより三日前。義輝が新久保城を囲んだという報せが景恒の許へ届けられた。これを聞いた光秀が単身国吉城へ入り、勝久を説得したのだという。勝久の挙兵はあくまでも若狭を想ってのことであり、昌経と違って野心から端を発したものではない。義輝が若狭は武田氏のまま統治を任せるつもりであること、逆賊三好・松永らに擁立された義栄に何ら正当性のないことを光秀は諄々と説いた。これに武辺者である勝久は大いに納得し、義輝が戻ってくる前に開城した方がよいという光秀の勧めに応じて城を開けたのである。

（こやつは……、余の期待以上の働きをしてくれるわ）

改めて光秀の才能に惚れ込んだ義輝は、上洛の暁には光秀を直臣にすることを決断した。

こうして若狭は武田義統の下で纏まることとなり、栗屋勝久も今の地位のまま留め置かれることになった。義統は義輝の支援に感謝を述べ、上洛の時には手勢を率いて参陣することを誓った。

義輝は一乗谷へ戻ることになった。六月二十二日のことである。

また今回の若狭出兵は思わぬ戦果を上げることになった。義輝の呼びかけで決起した丹波衆が内藤宗勝と激しく交戦し、若狭の争乱が鎮まった後も互いに退かぬ状況が続いた。

そして八月二日。

丹波・黒井城を攻撃していた内藤宗勝が城方の反撃を受けて討ち死（宗勝と共にあった逸見昌経も討ち死）にしたのである。宗勝は丹波一国を任されていた程の人物であっただけに、三好方の損害は計り知れないものとなった。

これを機に丹波での攻防が逆転することになる。

【続く】

第二幕　若狭出兵　―義輝、猛る―（後書き）

上洛編第二幕です。

正直、栗屋勝久の立ち位置には悩みました。野心で謀叛に奔った一面もあるので。しかし、後の義統の子・元明も救出していますし…、若狭武田家への忠節があり、ただ取り巻く状況が彼を謀叛へ奔らせた、としました。

逸見昌経は問答無用です。

第三幕　永禄八年　夏　―決戦の時、迫る―

六月二十五日。

若狭の失陥を重く見た三好・松永らは前将軍・義輝へ対し、将軍・義栄の名で討伐令を出した。しかし、傀儡将軍である義栄の力は有名無実化しており、世間の反応は薄かった。

三好・松永が義輝の暗殺を目論見、将軍職を簒奪したことは既に天下に広く知れ渡っていた。故に表立って義栄に味方する大名は殆ど皆無であり、危機感を募らせた三好日向守長逸は幕府の役職を乱発し、手当たり次第に周辺勢力を味方へ引き込もうと画策した。

具体的には…

関東管領を北条家に、上野守護を武田家に任じることによって義輝の味方になるであろうと予測された上杉輝虎を牽制する策に出た。しかし、この軽率な行動は上野守護を武田に任じることへ北条家が不快感を示し、武田からは義輝を襲った理由を詰問されるという事態になり、使者は“義栄など何処の馬の骨か分からん御仁の命令など聞く理由がござらん”との返事と共に這々の体で帰って来た。ならばと西国の毛利に期待をかけて西国探題へ任じたが、ここでも使者は歓迎されず役職への就任も辞退された。

これを地方の有力大名には三好の影響力が弱い所為と考えた長逸は、三好家の強大さを知る近隣の諸大名へ守護職を与えることにした。しかし、義輝の生存と若狭の失陥を知る彼らは三好・松永の卑劣なやり方に揃って反発、唯一守護職を受けたのは美濃の斎藤龍興だけに終わった。

龍興は国中に“将軍・義輝が信長を美濃守護に任じる”という噂が広まっており、事の真偽を確かめるために越前へ使者を遣わしていた。これをまだ若狭へ出陣する前の義輝が否定しなかったので、龍興は藁を掴む気持ちで守護職就任を受けたのだ。

しかし、この龍興の軽挙な行動は斎藤家の崩壊を早める一因となった。

結局、味方らしい味方を得ることの出来なかった三好方は、配下の将へ守護職を与えることによって政権の盤石化を図るしかなくなった。

管領	細川信良（晴元の嫡男）
管領代	三好義継
御相伴衆	三好長逸（山城守護も兼任）
御相伴衆	松永久秀（大和守護も兼任）
摂津守護	三好政康
丹波守護	内藤宗勝（同年八月に死去）
河内守護	三好康長
和泉守護	岩成友通
淡路守護	安宅信康
阿波守護	細川真之
讃岐守護	十河存保

長慶存命時までは主家であり守護家の細川一族を傀儡とし、名目上の守護としていた三好・松永であったが、ここにきてようやく完全に操れる将軍を手にしたことにより一族の守護化を図った。しかし、地場固めを怠った急場の策であったことは誰の目にも明らかであり、反三好勢力を勢いづかせる結果に終わる。

そこに、かつて三好長慶が誇った栄華は微塵も感じられなかった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝

七月二十日。
越前一乗谷・義輝の新御所

数日前より安養寺から仮普請の終わった新御所へ居を移していた義輝の許へ、久しぶりに細川兵部大輔藤孝が戻ってきた。

「兵部！ようした！」

義輝は開口一番、藤孝の働きを労った。二日前、文によって加賀一向宗との和睦が成ったことを報されていたからだ。

「はっ。加賀一向宗は本山（石山本願寺）の意向もあり、上様が上洛中は矢止めに応じるとのことにございます」
「大義じゃ。これで上洛の道も開けたと申すものよ」
「若狭の争乱も鎮まったとか。おめでとう存じます」
「なに、大したことはなかったわ」

実際に若狭出兵は半月ほどで終わるという、考えた以上に早期決着となった。最初にしては上出来であろう。しかし、その割には義輝の瞳には僅かな悲壮感が漂っている。その理由が将軍職の剥奪にあることは藤孝も察するところだ。

「越中門徒にも加賀衆の方から停戦を呼びかけて頂ける運びとなりました。直に上杉殿の上洛も叶いましょう」

「うむ」

相次ぐ吉報に義輝は満足そうに頷いた。

先月末、義輝が若狭から戻ってくると上杉輝虎が上洛に応じたという報せが届いた。義輝がこれに歓喜したのは言うまでもないが、何よりも喜ばせたのは輝虎の上洛が十月末辺りになるという報せだ。これは義輝が京を目指して出陣をする時期となり、それに合わせて朝倉や浅井など味方勢力が上洛準備に取りかかれるということを意味している。早ければ、今年中に帰洛が叶うかもしれない。帰洛さえ叶えば、将軍職への復帰も認められるだろうと思われた。

「兵部。輝虎が参るまで我らで軍略を練りに練らねばなるまいぞ」

「承知いたしております」

「そこでじゃ。朝倉とも図る必要があるが、一つ頼みがある」

「はい。何でございましょうか？」

「明智光秀じゃ。軍略を練るに当たってあれの智恵を借りたい」

「…なるほど、そういうことでございましたか」

藤孝としても光秀の有能さは理解している。自分とて、光秀を頼りにするところがあるからこそ将軍救出の一手を任せたのだ。そこに義輝が目を付けたということは、将来的に家臣化させるつもりがあることも同時に見抜いた。

「光秀殿だけを呼べば左衛門督殿に憚られましょう。故に朝倉殿の名代として景紀殿も招きましょう。さすれば景恒殿が代理で参るかと」

「おう、それがよい」

義輝が朝倉家中へそれほど信を置いていないことは藤孝も理解して

いた。その中でも唯一頼りとするのは敦賀郡司たる景恒・景紀親子のみである。この親子は義景が支持する景鏡派と対立しているために義輝寄りの方策を立てることが多い。

「それにしても本願寺がようも朝倉との和睦を認めたものじゃ」

朝倉家と一向宗の戦はもう数十年も続けられていることで、遺恨は深い。義輝の見立てでは上洛寸前まで縺れると考えていた。

「どうやら上方の情勢が慌ただしく、石山の門主が手を焼いているとか」

この頃、上方では義栄による新政権が周辺の寺社衆へ御教書を乱発していた。しかも手当たり次第と言って良く、その多くが寺社衆の権益を認めるものだった。寺社衆の中では新興の部類に入る本願寺としては敵対勢力も多く、義栄方の行動は好ましいものではなかった。元より管領・細川、三好長慶と対立してきた石山本願寺である。その三好と敵対する義輝を影ながら支援したとしてもおかしくはない。朝倉と敵対する北陸の一向宗へは、上意として言うことを聞かせればいい。

「どうやら、思ったよりも早く京へ戻れそうじゃ」

義輝の言葉通り、上洛は目前に迫っていた。

＝＝＝

八月一日。

総勢二万もの軍勢が美濃へ侵攻した。その行軍は神速の如し、稲葉山城を取り囲むのに一日もかからなかった。

尾張大名・織田上総介信長の軍勢である。

既に中濃は織田家の支配下に入っており、西美濃衆への調略も進んでいた。ここで信長は一気に斎藤家の本拠・稲葉山城を落とす作戦に出た。先代・義龍の死後、衰退著しい斎藤家は本拠を家臣の竹中半兵衛が僅か十七名で乗っ取るという事件を起こした。これが昨年二月のことである。

その後、半兵衛は城を龍興に返したが、自らの求心力が落ちていることを周辺国へ露呈する結果となり、人心は離れていく一方だった。中濃一帯も織田家に寝返り、守護職を信長に取られまいと逆賊の手先と成り果てる主君を家臣たちは嘆き、見限り始めた。

「猿（木下秀吉）よ。西美濃三人衆は如何にしておる？」

「はっ。人質を出す、とのことにございます」

猿と呼ばれた小汚い男は、身の丈に合わない大きな甲冑をガッシャガッシャと揺らしながら答える。

「ならば貞勝に受け取りに行かせる。者どもには儂の許へ参るよう伝えよ」

「ははっ」

そそくさと退散する秀吉と入れ替わるように入ってきたのは柴田権六勝家だった。その勝家に信長は命じる。

「城下を焼け」

「良いので？」
「構わぬ」

勝家は手勢に命じ、城下を焼き払わせた。斎藤道三が稲葉山の主になった天文二年（１５３３）より三十二年、美濃守護の土岐頼芸を追放し、この地が事実上の国府となった天文十年（１５４１）より二十四年後の今日まで繁栄を極めていた町並みは灰燼に帰した。

そして八月十四日。

西美濃三人衆（稲葉良通・安藤守就・氏家直元）らが信長の許を訪れ、臣下の礼をとった。中濃に続き、西美濃までもが織田家に寝返ったのだ。この事実は稲葉山城内に大きな衝撃を与えた。

翌日、未だ動きの見せない東濃の者たちに幻滅した龍興は密かに城を脱し、長良川を小舟で進んで伊勢長島へ逃れた。これにより稲葉山城は落城、東濃の地侍が信長への恭順を誓った。

ここに尾張織田弾正忠家の悲願であった美濃平定は成ったのである。

翌月、信長は居城を小牧山から稲葉山へ移し、名を岐阜へと改めることになる。

＝＝

九月四日。
越後国・春日山城

万余の兵が主君の合図を待っている。再び西上野へ進出してきた武

田信玄を食い止めるために出陣することになっているのだ。

「いざ出陣！」

号令と共に、軍勢が隊伍を組んで進んでいく。幾重にも掲げられた真っ白な軍旗が戦列を乱さずに行軍を続ける光景は、まさに上杉勢の精強ぶりを感じさせた。そのまま軍列は三国峠を越えて関東へ入る。

上杉勢は沼田を経て厩橋城へ入った。

厩橋城は輝虎の関東出兵の拠点となっている城で、一時は武田・北条の手に渡ったこともあったが、今は奪還し、城代に北条高広を据えて守らせている。ここより南の地は敵の勢力圏、その中に上杉方の諸将が点在しており、輝虎の救援を常に待ちわびている。

「高広、状況を報せよ」

「はっ。六月に倉賀野城が落ち、周りの諸城もことごとく武田の手に落ちてござる。信玄め石倉城を修復し、我らの箕輪城救援を阻む算段かと」

「ううむ……」

状況が悪い。石倉城は利根川を挟んで対岸、目と鼻の先にあり、ここに武田の大軍が入っている。それは輝虎が厩橋入りする際にも確認できた。兵法の常道を行く信玄は、先に川を越えることが不利になると知っているために上杉勢を攻撃してくることはなかったが、悠長にしていてよい状況ではない。何よりも石倉城の役目は上杉勢を阻んでいる間に箕輪城を落とすことにあり、厩橋城攻略の為の拠点ではないのだ。

（だがこれでは……）

はっきり言って劣勢である。早期決着を着けなくては義輝との約束には間に合わない。輝虎が上野にいられるのは遅くとも今月いっぱいまでだ。箕輪城を救うには眼前の石倉城を攻略し、途上の和田城を抜かなくてはならない。それを成す時間は輝虎にはないが、せめて石倉城くらいは落として行かねば上野の形勢は逆転不可能なまでに陥る。

「利根川を氾濫させればよいのです」

「なに？」

唐突に上泉伊勢守信綱が発言する。信綱は義輝の使者として輝虎の許を訪れた以降、一族へ預けた上泉城へ戻り、かつての主家・長野家や北条高広を扶けていた。

「天文の初め頃か、利根川が氾濫して石倉城が崩落したことがございました」

天文三年（１５３４）、信綱がまだ二十代半ばの頃である。大雨によって水かさの増した利根川が氾濫を起こし、鉄砲水が石倉城を飲み込んだのだ。その時、僅かに残った三ノ丸の跡地に厩橋城が築かれることになった。

「石倉城は未だ俄造（にわか）りでござれば、大水に耐えられますまい」

「されどそれでは、この厩橋とて一巻の終わりぞ」

高広が反論する。石倉城が対岸にある以上、この厩橋も被害を被ることになる。強度の違いから、ただこちらの方が被害が少ないというだけに過ぎない。また関東攻めの拠点を失うことにもなる。

「承知の上でござる。管領様がその必要はないと仰るのであれば、それで構いませぬ」

自分の意見はただの提案に過ぎないと言い切る信綱。信綱とてこのような戦法で敵を討つことは本意ではない。やはり戦で堂々と決着をつけるのが筋道と考える性格だ。これには輝虎も同じであることを信綱は知ってる。しかし、同時に輝虎が上洛のために急いでいることも知っている。故に敢えてこのような方法を進言したのだ。

（厩橋を犠牲にすれば、武田に打撃を与えることが出来る。さすれば上野は元より信玄が儂の上洛を阻むことも留守を狙うことも叶わなくなる）

輝虎は迫られる。己の矜持か、主君への忠義か。

（上様は妻子、母御を殺されてもなお生き恥を晒し、逆賊を討つ御覚悟をなされた……）

かつて春日山にて信綱に聞かされた話を思い起こす輝虎。義輝の無念に比べれば、今の自分の悩みなど大したことではないと気づく。

輝虎の眼がカッと見開いた。

半月後、石倉城は厩橋城と共に地上から姿を消した。氾濫した利根川の大水に飲まれたのだ。しかし、城ごと流された武田勢に対し、上杉勢は事前に厩橋を離れたことでほぼ被害は皆無だった。

数日後、輝虎は軍勢の大半を上野に残し、越後へ帰って行った。十月の初めのことである。

【続く】

第三幕　永禄八年　夏　―決戦の時、迫る―（後書き）

まさかの二話連続投稿です。正直、疲れました。

また作中で信綱が軍師っぽいことになっていますが、そういう設定にしたのではなく、あくまで石倉城に限って“経験から物を言った”だけです。その後も軍師として活躍するわけじゃありません。

さて、次回から上洛編も盛り上がっていく予定です。若狭出兵では戦らしい戦を書けなかった（なかなか難しいのです、合戦を書くのは…）ですが、義輝と三好・松永の大合戦ではしっかりと書いていきたいと思います。

第四幕　いざ出陣　―諸大名集う―

十月二十五日。
越前国・一乗谷

ようやく待ちに待った瞬間が訪れた。

城下に長蛇の列で入ってくる軍勢。掲げられる“毘”そして“龍”の軍旗。関東管領・上杉弾正少弼輝虎の軍勢である。事前に領主より報せを受けている住民たちはこれを歓迎した。

一方で不可解なこともあった。七千と聞いていた上杉軍の数が明らかに多いのだ。どう数えても一万を越えている。

これには訳があった。

輝虎は義輝に報せた通り、七千で春日山を出陣した。ただ輝虎の上洛を悩ませるのは関東や甲斐の武田ばかりではなく、越中の争乱も長年に亘って輝虎を悩ませてきた種だった。ここ二、三年越中は比較的落ち着いてはいるものの留守を衝かれでもすれば堪ったものではない。そこで一計を案じることにした。

「上様の窮地である。臣下たる者、これを御扶けするべし。越中の者どもは我らが義挙へ加わられよ」

輝虎は越中の者たちを自軍に加えることにより、留守中に叛乱を起こさせないようにしたのだ。元より上杉方である越中の国人・椎名康胤はもちろんのこと、先年に輝虎へ降伏した越中守護代・神保長

職も輝虎の命令を拒否できず、矢継ぎ早に軍列に加わった。さらに輝虎は上杉家と友好関係を結んでいる能登守護・畠山修理大夫義綱へも合力を呼びかけ、畠山家は輝虎の申し出を快諾、義綱の父であり前守護の左衛門佐義続が上杉勢に加わることになった。但し、どの軍勢も上洛の仕度を整える時間が余りにもなかったために数は能登・越中勢を合わせても五千程度でしかなかった。

これにより上杉輝虎の上洛軍は一万二千にまで膨れ上がったのだ。だが、予定より多いというのは義輝にとって喜ばしい報せだった。

「輝虎！よう参った！」

「上様！？かようなところまで……」

報せを受けた義輝は門前で輝虎を出迎えた。それほどまでに上洛を決意した輝虎の来訪が嬉しかったのだ。

突然の出来事に輝虎は下馬し、義輝の許へ駆け寄る。手を叩いて喜ぶ義輝の顔には刀創と思われる傷があった。かつて京で義輝に謁見した時にはなかった傷だ。洛中より脱出する際に付いたものだと推察され、これを見た輝虎は涙し、思わず視線を逸らして頭を下げた。

そこへ義輝が近寄り、そっと肩を抱き起こした。

「そなたが来てくれたならも安心じゃ」

「勿体なき御言葉にございます。必ずやこの輝虎が、上様を京へ御戻し致します」

「うむ。頼りにしておるぞ」

義輝と輝虎、六年振りの再会であった。

「左衛門佐もよう来てくれた」
「上杉殿に御誘いで今回の義挙を知った次第にて。前もって御報せ頂ければ、畠山家総出で参りましたものを…悔しゅうございます」
「よい。来てくれただけで余は嬉しいぞ」
恭しく礼をする義続であったが、実のところ輝虎の言う義挙にはあまり関心がない。ただ参加してそれなりの功を立てれば、将軍と関東管領を後ろ盾に領内の大名権力を強化できると考えていたから、参陣したに過ぎない。その点、上方で幕政を牛耳るなどという野心は持ち合わせていないため、信用は出来た。

さていよいよ上洛、と思いきや問題が一つあった。朝倉勢の仕度がまだ整っていないのである。義景は最後の最後まで上杉の上洛を疑っており、家臣らに上洛の仕度を命じていなかった。ようやく命令を出したのは上杉勢が加賀に入ったという報せを受けた後である。故に一乗谷に集まっているのは敦賀郡司・景恒と一乗谷に近い所領を持つ者たちだけで、筆頭家老たる景鏡ですら未だ姿を見せていないという有様である。

「左衛門督殿が申すには、まだ五日はかかるとのこと」
「悠長な。輝虎が来ることは前もって分かっていたことではないか」
ここに至ってもなお鈍重な義景に腹を立てる義輝。上杉勢が来たことで、すぐにでも出陣したいという逸りを抑えきれずにいる。
「どうか落ち着いて下さいませ。この輝虎、上様を京に御戻しするまで帰らぬ覚悟で参りました。故に時間はたんとございます」
「おおっ、まことか！」
「はっ。故にまずは軍略を御聞かせ下さりませ」
「うむ。十兵衛、委細を説明せよ」

「畏まりました」
光秀が諸将の前に歩み出る。
「おおっ。そなたが明智十兵衛か」
「手前をご存じで？」
いざ軍略を説明しようとした矢先、光秀は急に輝虎から話しかけられたことで戸惑った。
「うむ。勢州（上泉信綱）から聞いておる。何でも上様救出に一役買ったとか」
「とんでもございませぬ。公方様救出は塚原様、伊勢守様のご活躍あればこそにございます。手前はささやかなお手伝いをしたまでのこと」
「されどそなたの手助けで上様の御命が救われた。この輝虎から礼を言わせてくれ」
「手前などに……勿体のう存じます」
輝虎は光秀の謙虚で驕（おご）らない様に好意を持った。一方の光秀も輝虎をかなり堅い人物かと想像していたのだが、初対面の者の前でも飾らない人柄に“噂とは当てにならないものだ”として印象を変えた。
「では軍略を御説明申し上げます。まず我らの動きに呼応し、反三好の者どもが挙兵する手筈になっております」
義輝が各地へ送った御内書により反三好包囲網とも呼べるものが既に出来上がっていた。具体的には河内の畠山、大和の筒井、播磨の三木、丹波で内藤宗勝を討ち取った萩野直正らが一斉に挙兵する手筈であり、中には既に活動を始めている者もいる。また三好よりの

独立を画策していた丹波の波多野秀治からも同心する約束を取り付けていた。

「我らは来月の朔日(ついたち)に一乗谷を出陣、北国街道を南下し、敦賀で武田治部少輔様と合流、刀根坂を経て余呉で浅井備前守様の軍勢と合流いたします」

朝倉勢が揃うのに五日かかる。つまり本来であれば三十日に出陣できるのだが、せっかくなので縁起が良いとされる朔日に出陣することになった。また武田勢は二千、浅井勢は五千を出す予定になっている。これに朝倉勢が一万三千、上杉と北陸の軍勢が一万二千、合わせて三万二千を数える。

「ここで、軍を二つに分けます」

「二つに？三好勢は三万余と聞く。兵を分ける理由は？」

兵法では数が同数の場合、兵を分けるのは下策とされている。それを敢えて行うにはそれなりの理由があって然るべきである。

「はっ。恐らく三好・松永らの軍勢は、公方様の上洛を勢多で阻むと思われます」

古来より東から京へ攻め込む軍勢は、勢多川で防衛するのが常であった。源平合戦では平家が木曾義仲軍を阻み、義仲は源義経を同様に阻んだ。さらに承久の乱では後鳥羽上皇軍が鎌倉幕府軍を、南北朝の戦では足利直義が南朝軍とこの地で激戦を繰り広げた。しかし、いずれも防衛側が敗北している。それほどまでに京の防衛は難しいのだ。それを知っている輝虎にしては、回りくどく兵を分けずとも堂々と勢多を押し渡ればいいと考えている。また輝虎は兵を割いたところで自分がいる軍勢が負けるとは微塵も思っていないが、兵法

に反する策を採る理由は知っておきたかった。

「一手を西近江路より進ませることで、敵の背後を脅かせます」
「その考えは分からぬでもない。されどそれでは、勢多で合戦に挑む際に敵勢に数で劣るのではないか？」
「ご安心を。既に我らは敵勢を上回っております」

光秀の説明では尾張の織田家、六角家より宿老の蒲生定秀、勢多城主・山岡景？が参陣することが付け加えられた。

「つまり一手を割いたところで、こちらが敵に劣ることはないと？」
「はっ。左様にございます」
「ならば申すことはない…と言いたいが、一つだけ」
「何でございましょう？」
「六角殿は出陣されないのか？」

輝虎の疑問はもっともだった。こちらは三好・松永の謀略にあったとはいえ前将軍・義輝が出馬するのだ。朝倉と浅井、武田は揃って当主が出陣する。上杉に当たっても輝虎が出てきているし、畠山家は当主ではないが前当主が出陣している。織田家からも信長が出陣するという報せが届いている。なのに敵地にもっとも近い六角からは当主はおろか一門の出陣もないのでは話にならない。

「親子揃って病とか」
「何を莫迦な。上様に対する叛意を疑われても言い訳できぬぞ」

病が嘘であることは明らかである。それを咎めようとする輝虎を義輝が制した。六角承偵が出てこない原因が浅井との対立にあると知っているからである。遠国の領主である輝虎はその辺りの事情が疎く、気分を害するだけだった。

（あれはそういう男だ）

ただ義輝としては最初から承偵には期待しておらず、家臣らの参陣があっただけでも儲けものと割り切っている。

一方で光秀には拭いきれない不安があった。織田家のことである。何度も問い合わせても“参陣する”との返答が来るだけで未だにどの程度の兵を送ってくれるか、合流地点が何処なのか、明確な回答がないのだ。業を煮やした光秀は自ら三度使者に出向いたが、二度は同じ返事ではぐらかされ、一度は鷹狩りに出ているとして会えず終いだった。

それ故に西近江路に派遣できる兵は武田義統を大将に、朝倉景恒の敦賀勢、朽木元綱の計五千しか避けなかった。

「次に陣立てですが先陣が六角勢、二陣に浅井勢、三陣が織田勢、四陣が畠山、越中勢、五陣に上杉勢、そして上様の本陣は朝倉勢が担当致します」

「お待ちあれ！」

「上杉様、何か？」

「我ら上様を扶けんと遠国から遙々参った次第。それなのに五陣とは納得がいかぬ。替えて下され」

これに光秀は困った。主な軍略は光秀と藤孝が練ったが、陣立てについては義輝の考えだったので変更は憚られた。義輝はもっとも信頼する上杉勢こそ本陣と考えていたのだが、自分を保護している手前、朝倉勢を本陣に据えなければならず、ならばもっとも自分に近い本陣前にと上杉勢を置いたのだ。

しかし、輝虎は義輝を守るためではなく、三好・松永らと戦うために来ている。

「我らは地理に不案内である故に先陣とは申さぬが、二陣を任せて頂きたい」

輝虎の本音としては先陣である。しかし兵法では“もっとも戦地に近い者が先陣を切る”ということになっており、六角勢の先陣は戦の常道は踏まえたものだ。よって二陣を希望した。

「よい、許す。余に越後勢の戦ぶり、見せてくれ」

「ははっ！」

これに義輝が応じた。

確かに輝虎を傍近くに置きたいというのはあるが、一方で精強と知られる越後勢の強さを見てみたいという気持ちもあった。

そして十一月朔日。

「いざ出陣！」

前将軍・足利義輝は朝倉・上杉連合軍と共に一乗谷を出陣、一路京の都に向かって北国街道を南下した。途中、敦賀で武田義統勢と合流し、刀根坂を越えて近江へ入る。義輝は半年前に僅かな供と落ち延びてきた道を三万近い軍勢と共に通ることは非常に感慨深いものがあった。

（もはやこの道を反すことはあるまいぞ！）

京の都が近づくにつれて、義輝は胸の内に熱く湧き立つものを感じていた。だがそれを抑える。高ぶる気持ちを爆発させるのは、ここではない。

軍勢は近江へ入り、余呉に到達。この地で義輝は浅井備前守長政の出迎えを受けた。

「浅井備前守にございます。これより先は、我々が御案内仕る」

「おおっ！そなたが備前守か」

長政の風貌は義輝の想像以上だった。

凡そ六尺（１８２？）にも及ぶ身長に見合った大きな体躯、若干二十歳の若者は幼さは残るものの精悍な顔立ちは戦国武将として十分なものだった。初陣で六角の大軍を破り、若年にて家督を継いだというのも頷ける。

（こやつは……左衛門督と違って頼りになる）

それが義輝の長政に対する印象だった。

京を追われ、将軍職を失ったものの若狭を平定、念願の上洛軍を発し、予期せぬ援軍、頼もしい勇将との出会いもあった。事は順調に運んでいる。しかし、全て義輝を喜ばせるものばかりではなかった。

浅井家からの報せが入る。

それは“近江の何処にも織田軍の姿がない”というものだった。

【続く】

第四幕　いざ出陣　―諸大名集う―（後書き）

少し間が空きましたが、次話投稿です。

今後は投稿がまちまちなるかもしれませんが、今年中に上洛編終了までいければと思っています。

第五幕　邂逅　―光秀、忠臣と出逢う―

十一月三日。
洛中・慈照寺

越前へ逃れている義輝が上洛へ向け、一乗谷を発ったという報せが早くも京に届いた。

「ははは…話が違うではないか！？」

一段高いところで脇息に抱きついて怯えている男の名は、足利義栄。第十四代足利幕府の将軍であり、全ての武家の頂点に立つ男である。

「それだけ、前将軍（さきのしょうぐん）が本気だということです」
「敵は三万を越えると聞いた」
「我らも三万、畿内にいる味方を含めれば我らが上にござる」

一方で冷静に状況を説明するのは今や京の主とも言える松永弾正少弼久秀である。

「将軍の味方は朝倉と浅井だけと申したではないか！上杉が来るなぞ聞いておらぬ！！」
「だからどうしたと言うのです。田舎大名が一人増えたところで、何も変わりませぬ」
「関東管領ぞ！あの武田信玄すら勝てなかった相手ぞ！」
「上杉はもはや関東管領にあらず。信玄めも所詮は田舎大名にござる」

上杉輝虎や武田信玄が田舎大名かはともかく、義栄政権下では上杉

家に対して関東管領の再任は行っていないのは事実だった。つまり朝廷が認めた正式なる武家政権の足利幕府では、関東管領は不在状態となる。

「上杉は先の関東攻めで十万を超える大軍を動員したと聞いたぞ」
「噂に過ぎませぬ。その証に、今回は一万にも満たぬと聞いてござる」

久秀がどのように言い繕われようが、義栄は恐怖心を拭い去ることは出来ずにいる。この戦に出たことのない男は、ただただ“義輝迫る”の報に怯える事しか出来なかった。

「どうやら上様は我らの力を侮っておる様じゃ。上方にて二十五年、向かうところ敵なしの三好家に敵う者などおりませぬ」
「敵なしじゃと！？何度か負けておるではないか！知っておるぞ！」
「小競り合い程度の戦にござろう。最終的に勝ちを収めたのは我ら三好なり」

久秀が義栄を説得しているのも近江へ出陣させるためだ。迫る軍勢の総大将は前将軍・足利義輝。ならばこちらも将軍を総大将に担がなければ、三好方の将はともかく兵の士気は上がらない。

（これだから阿呆は困る。これが義輝ならば即出陣に応じたものを……）

久秀は自ら追放した相手ながら、将軍としての器量を持つ義輝を羨んでいる自分を馬鹿馬鹿しく思った。

「もう宜しい！前将軍めは我らのみで迎え討つ。それで宜しいな！」
「わ…分かればいいのじゃ。分かれば……。うむ、吉報を期待して

おるぞ」

出陣せずに済むと知って安心したのか、尊大な態度を取り戻す義栄。そんな義栄の言葉を無視して立ち上がった久秀は、息のかかっている小姓たちに命じる。

「よいか！　けして将軍を外に出すでないぞ！」

このような男とはいえ、征夷大将軍である。将軍は三好・松永の象徴、勝手に堺などに逃げられては政権の崩壊に繋がりかねない。

不安を残しつつ、久秀は戦場となる近江へ向かう。

＝＝＝

十一月四日。

美濃国・岐阜城

義輝と共に近江に入った光秀は、織田軍の姿がないと聞いて愕然とした。すぐさま義輝に許可を貰い、己の面目に懸けて信長に約束を履行させるべく岐阜へ向かった。

しかし、城下に入った光秀は驚愕する。そこには辺り一面を埋め尽くすほどの軍勢が犇めいていたからだ。その数、凡そ二万を越える。しかし、これが義輝への援兵かどうかはまだわからない。何処か別の地へ出陣する軍勢かも知れないのだ。

光秀は駆け足で信長を訪ねた。岐阜城は信長が攻め落とす際に城下を焼いたこともあり、あちらこちらで普請の最中であったが、その

中でも政庁となる信長の居館は早々に金華山の山麓部分に築かれており、冠木門に虎口、土塁と最低限の防備も整えられている。

「おう、明智か。如何した？」

現れた信長は未だに軍装を纏っておらず、平服のままである。光秀が来訪した理由を掴みかねているようだった。

「如何したではございませぬ！公方様の上洛に兵を出して頂けるとのお約束であったはず。日取りは前もって伝えたはずです！」

「……ふぅ。そなた、眼は付いておらぬのか？」

「では城下の軍勢は、公方様への援軍でございますか！」

「で、ある」

その瞬間、驚喜したと言っていいだろう。光秀自身、このような気持ちになったのは生まれて初めてだった。少なくとも覚えはない。何せ城下で見た二万を越える軍勢が加われば、義輝の軍勢は五万を越えることになる。三好を圧倒できる。

「さ…されど兵数は約束できないと織田様は…」

「言うたが、美濃攻めの最中だとも言うたぞ」

「た…確かに……」

光秀が信長に援軍を要請した際、兵一万を要求したのは出し惜しみをさせないためだ。戦国武将の兵を出すと言っても少勢で済ませることが多く、それを懸念してのことだった。しかし、その常識は目の前の男に覆された。それも良い意味で。

光秀の脳裏には一つの言葉が自然と浮かんだ。

“勝った”……と。

「ならば今すぐ御出陣を御願い申し上げます。公方様は既に近江に入られており、三好・松永との決戦は間もなくとなりましょう」

「悪いが、それは出来ぬ」

「何故にございましょうか！」

柄にもなく素っ頓狂な声を上げる光秀。既に岐阜城下に二万の軍勢が整い、義輝の近江に入った。何を躊躇する必要があるというのか。その理由が光秀には分からない。

「まだ兵が揃っておらぬ」

「これ以上増えるというのですか！？」

光秀はさらに驚いた。

「都合三万五千。もっとも間もなく駆けつけてこられる松平殿の軍勢と合わせた数だがな」

途方もない数だった。光秀が義輝と共に東奔西走して掻き集めた軍勢とほぼ同数の軍勢を信長は動員しようというのだ。確かに濃尾凡そ百万石を領する織田家にはその力はあるだろう。しかし、信長は美濃を攻め取ったばかりだ。

それには理由がある。

元々信長が治めていた尾張は有数の商業圏であり、熱田や津島はその中心である。故に上洛に必要なものは概ねそこで揃う。一方で信長は美濃を殆ど調略で落としたことにより領地替えが龍興の直轄地もしくは最後の最後まで味方した一部の側近の所領しか行われてお

らず、未だ美濃の領主たちは斎藤家が国主だった頃とそう変わりない。故に信長が命令を下すだけで充分な兵数を動員することが出来る。

また信長は後顧の憂いを断つために武田信玄の四男・勝頼へ養女を嫁がせることにした。現時点では既に結納を済ませており、輿入れを待つだけとなっている。さらに信長は妹の於市を浅井長政に嫁がせた。隣国、飛騨と伊勢には信長を相手に出来るほどの勢力はない。これにより全軍を躊躇なく動員することが可能になったのだ。

さらに松平が参陣することも嬉しい報せだ。

松平氏は三河の有力者でかつては三河一国を支配していた時期もある。少し前までは東海三カ国を治める今川家の麾下に甘んじていたが、信長が桶狭間で今川義元を討つと独立、一向一揆との抗争を経て今では三河一国をほぼ平定している。

「な…ならば一部の軍勢だけでも送っては頂けないでしょうか？」

光秀は懇願する。織田の同盟者である松平が参陣する以上、信長は岐阜を動けないだろう。しかし、いま城下にある二万の軍勢の一部を近江へ送ってくれるだけでも勝敗は大きくこちらへ傾くのだ。

「…ふむ。ならば西美濃衆五千を預ける」

「有り難く存じま……預ける？」

「援軍が必要なのであろう。そなたが率いて行け」

「お…お待ち下され！手前は他家に仕えし……」

「帰蝶の縁者で美濃の出、であろう。ならば我が身内も同じ。美濃衆を率いても何ら問題はなかろう」

「し…しかし…」

「この状況で使者など務めておるのじゃ。どうせ自ら率いる軍勢も持たぬのだろう？義輝公の御為に軍勢を率い、働きたいとは思わぬのか？」

痛いところを衝かれた、と思った。

「儂の家来は忙しくてのう。そちが断るなら、上様への援軍は全軍が揃うまで待つことになるが…」

意地悪く信長が光秀に話す。信長としても朝倉の客分でありながら領分を越えて義輝に尽くす光秀に興味を持っている。その器量を試そうとしていた。

また光秀と自ら兵を率いて義輝に奉公したいという気持ちは強い。しかし、悲しいかな今の自分はその立場になかった。だからこそ出来ることをやろうとこうして信長の許へ使者として出向いているのだが、信長の破天荒な申し出を受ければ、自らの望みが叶う。そしてそれは何よりも義輝の扶けになる。

「…お引き受け致します」

こうして光秀は思わぬ軍勢を率いることになった。しかし、通常なら他家から送り込まれる人間は軍監や目付などになる。一隊ならともかく五千もの兵を他家の人間が率いるというのは問題のある行為だ。それが早くも露見することになる。

「何故に光綱（光秀の父）の倅如きの指図を受けねばならぬ。信長様は我らの忠誠をお疑いか」

美濃衆は信長に従ったばかりで心服しているとは言い難かった。ま

た彼らは明智家を既に没落した家と認識しており、けして自分たちの上に立つ者ではないと思っていた。光秀に預けられた西美濃衆の面々は揃って挨拶に顔を出すようなことはせず、こちらから訊ねても会って貰えなかった。

（これでは軍勢を預けられても何も出来ぬではないか！）

と、心の中でそう叫ぶ光秀だった。

「申し訳ござらぬ。主たちは信長様の御命令には従うが、明智様の下知には従えぬと申しております」

それでも信長の命令である以上は光秀との連絡は必要であり、稲葉良通の家臣・斎藤内蔵助利三が付けられることになった。利三は幕臣の蜷川氏と縁が深く、義輝との連絡役を務める光秀を相手にするには適任ということで抜擢された。

「こちらこそ済まぬことをしたと思っておる。私は織田様に援軍を請いに参っただけのこと、戦の采配まで指図したりはせぬ故に御安心下され」

「されど、信長様より大将は明智殿と伺っております」

「儂とて立身出世の欲がないわけではござらぬ。されど織田様より預かりし公方様への援兵。何よりも大事は公方様を京へ御戻しし、天下の秩序を回復することにござる。私が原因でせっかくの軍勢が使い物にならぬでは意味がござるまい」

最初は自らの手で采配を振るえるかと意気込んだ光秀だったが、西美濃衆の面々に臍（へそ）を曲げられてしまっては意味が無いので名目上の大将として道案内役に徹することにした。

（まったく…指図をせぬとは清廉な方ではないか。殿は何故に明智殿を嫌われるか）

一方で利三は腹立しく思った。

所詮、良通の考えは大局を見、天下を考えている光秀からすればどうでもいいことに過ぎない。地方豪族の意地の張り合いなど“公方様の御為”の言葉で一蹴される程度のことなのだ。幕臣との繋がりが深い利三は、光秀の考え方に共感を覚えた。

「明智殿。主がどう申しましょうとも我が手勢だけは明智殿の下知に従いましょう。何なりと御命じ下され」

「いや、それでは斎藤殿が良通殿に叱られましょう」

「御心配には及びませぬ。信長様よりの御命令が、明智殿の下知に従うことなのです。遠慮は無用と申すものにござる」

「有り難い。必ずや働きを無駄に致すことはしませぬ」

利三の申し出により、光秀は三百だが意のままに動かせる軍勢を手にする事が出来た。この僅かな兵が目の前に迫っている戦で思わぬ活躍をすることになるとは、光秀も利三も知る由もなかった。

そして、この二人の出会いが長い付き合いの始まりになることも……

【続く】

第五幕　邂逅　―光秀、忠臣と出逢う―（後書き）

次話投稿です。

やっぱり光秀と言えば、斎藤利三ですよね。まだ彼は光秀の家臣ではありませんが、後々は……

さて次回、ようやく両軍が出揃います。合戦も間近です。

第六幕　勢多対陣　―長逸、謎の余裕―

十一月六日。
近江国・佐和山

北近江の領主・浅井備前守長政の案内で行軍を続ける義輝は、この地で光秀の率いる美濃勢と合流した。光秀から事情を聞いた義輝は上機嫌に笑った。

「はっはっはっは！そちが大将か！？上総介も面白いことをするのう」

これに釣られて諸将も陽気に騒いでいる。しかし、義輝と違って光秀が大将であることが嬉しくて騒いでいるのではない。織田勢が三万五千もの大軍であることが勝利を決定づけたと考え、浮かれているのだ。

「これで勝ったも同然ですな、上様」

一色藤長が勝利を確信する。藤長だけではない。北陸勢や長政もやはり勝利は間違いないものと考えていた。織田勢が合流すれば義輝勢は全体で七万になる。対する三好・松永が三万余であることは既に勢多を領す山岡美作守景？から報せが入っているので、倍以上の軍勢となる。常識では倍する軍勢に野戦で勝つことなど不可能に近い。

しかし、そんな中で笑っていない者が三人だけいる。

一人は明智光秀本人。いきなり大将を任せられながらも美濃勢は言

うことを聞かない始末。そんなことを知らない義輝らは陽気に笑っているが、自分はとてもそんな気ではいられなかった。僅かに自らの意の届く斎藤利三勢を如何に活用するか、脳漿（のうしょう）を振り搾っているところだ。また朝倉義景も笑っていない。というより、苦虫を噛み潰したような表情でいる。家格が下のはずの信長が自身の倍する軍勢を率いてくることが、単に面白くないのだ。

そして瞑想するように諸将ひいては義輝の様子を窺っていた上杉輝虎も、その一人だった。

「皆々方、浮かれるのも宜しゅうござるが、戦はまだ始まっておらぬことをお忘れなきよう」

「されど上杉殿。こちらは七万、勝ちは揺るぎないかと。三好の栄華も数日の内でござろう」

「三好の名は天下に轟いておる。簡単に勝てる相手ではなかろう」

「三好の隆盛は修理大夫（長慶）あってのこと。かつての勢いは見る影もござらぬ」

「黙らっしゃい！喩（たと）え十万を持ってしたところで、勝てぬ戦も有り申す！」

いきなり輝虎が浮かれる諸将に一喝した。大兵を得たことで三好を侮り始めており、楽勝気分が漂っていた。これでは、勝てる戦も勝てない。

輝虎は、大兵を持ってしても勝てない戦があることを知っている。それは四年前の小田原攻めで経験したことだ。

永禄四年（１５６１）三月。輝虎は関東管領・上杉憲政を奉じて小田原城を攻めた。この時、常陸の佐竹、安房の里見、下野の宇都宮、武蔵の太田、成田など関東諸侯が挙って輝虎の許へ馳せ参じてきた。

その数、十万を超えた。当時、輝虎は義挙に続々と参じる諸侯を見て、此度の小田原攻めで北条は滅び、足利公方が鎌倉へ帰し、それを関東管領として自分が支えることになるだろうと信じて疑わなかった。

しかし、結果は惨敗と言っていいだろう。十万を持ってしても小田原城の一郭すら落とすことが出来なかったのだ。

「済まぬ、輝虎。少々浮かれておったわ」

輝虎のただならぬ雰囲気を察し、素直に己の非を義輝は認めた。

「申し訳ございませぬ。あの時の六角の過ちを、某が行うところでした」

若い長政もこれに続く。自身で既に倍する軍勢を討ち破ったことのある長政は、今の状態の拙さを理解できないはずはなかったのだ。

「されどこちらが有利なのは間違いございぬ。堂々と参りましょうぞ」

自らの一喝で消沈している諸将を宥めることを輝虎は忘れなかった。戦の前なのだ。士気は高くなければならない。故に、輝虎は敢えて義輝の前でこのような行動を取った。

「だかこれからどうする？上総介を待つか」

今後の方針について、義輝が輝虎に問いかける。しかし、輝虎は静かに首を左右に振った。

「いえ、このまま進みましょう。既に今ですら三好に引けを取らぬだけの軍勢がございます。先に陣地を築いておく必要もございますれば…」
「そうか。ならば行くとしよう」

こうして西美濃衆五千を加えた義輝勢は、東山道を西へ進んだ。三好・松永の待つ勢多へ向けて…

＝＝＝

好下野守政康を配し、背後の伽羅山全体に陣城を築いている。またそれを支援するように勢多の南、田上に松永久秀の八千が布陣しており、義輝勢が勢多川を渡ろうとすれば側面を衝ける格好となっている。また逆に義輝勢が先んじて松永勢を攻撃しようとすれば、大戸川を天然の堀とした堂山、笹間ヶ岳に築いた陣城に籠もる。義輝勢が後方攪乱（かくらん）の為に送り込んだ武田勢も岩成友通が防いでおり、坂本より南へ進出するのを防いでいる。

まさに鉄壁の布陣である。

「だが守るだけでは勝てまい。こちらから攻めかかるべきでは？」

「いえ、けして我らから攻めかかってはなりませぬ」

これが義継に理解できなかった。

攻め込んできたのは義輝側であるため、こちらが自然と守勢になるのは理解できる。しかし、長逸の策は守り一辺倒で義輝が諦めて撤退するしか勝つ方法がない。

「堅く陣を守っていれば自然と勝利は我らに転がり込んで参ります」

と言ってニヤリと笑う長逸。その怪しげな表情が若い義継を不安にさせる一因でもあったが、義継を名目上の主君と扱いながらも軽んじている長逸はそれの意味するところを教えるようなことはしていなかった。

（策があるなら申せ！）

というのが義継の心情であった。長逸といい久秀といい、自分の知らないところで好き勝手をやっているのは分かっている。だが彼ら

に支えられなければ三好の当主ですら居られないことを義継は承知している。

「さて、前将軍が如何様な策を講じてくるか、見物すると致しましょう」

長逸の眼が東を向く。しかし、視線は義輝勢の遙か後方を向いていた。

＝＝＝

義輝はあくまでも議論を見守る形で己の考えを述べる真似はしなかった。自分が意見を言えば、それで決まってしまうからだ。

開戦派の主張は、現時点で既に敵勢を上回っていることだ。三好は凡そ三万。こちらは合流した織田勢、蒲生・山岡勢と合わせて三万五千となる。既に数で上回っているのだから、これ以上に敵が守りを固めない前に攻めかかるべきと主張する。

慎重派の主張は、勢多川を渡る以上は攻める側が不利、数の優位など簡単に吹き飛んでしまうことを問題視した。また織田・松平勢が三万が合流することは分かっているので、これを待つべきと主張する。

「ふん！いつ来るか分からぬ者を待っても仕方あるまいて」

慎重派が開戦派を押し切れないのはこれが理由だった。未だに信長よりいつ合流できるか報せが届かないのだ。戦巧者である輝虎がいるために即座に開戦には至らなかったが、押し止めるもはもう限界だった。

「叡山も堅田衆も我らの味方に転じた。機は熟したと思うが？」

比叡山は古くから王城鎮護の地とされ、山全体を境内とする延暦寺の協力は京を支配する上で必要不可欠だった。三好・松永の横暴に堪えかねた延暦寺が、軍監として西近江路を進む武田勢に身を投じている細川藤孝の働きかけにより味方となったのだ。

また琵琶湖の水運を握る堅田衆も大坂湾での交易を重視する三好家を快く思っておらず、寝返ってきた。大勢は、徐々に義輝方に有利になりつつある。

「あと二日待つ。それで上総介より報せが届かねば、戦を始める」
義輝の断により、軍議は開戦派優位の下で決した。

＝＝＝

「そなたは兄上が頼りとする智恵者と聞いたぞ」

覚慶のその言葉こそは嬉しいものだったが、かといってすぐに何かを閃くものではない。そもそも満足のいく策などあれば、既に義輝に言上している。

だがその時、光秀はふと昼間に聞いた“叡山”という言葉を思い出した。そして、目の前の貴人へ眼を向ける。

「な…何じゃ？」

「大変申し上げづらいことなれど、覚慶様の御協力を賜れるのであれば……」

「お…おお！兄上の為ならば何でもするぞ」

「某と共に、叡山へ参っては頂けませぬか！」

ところが、光秀は意外な来客をきっかけに光明を見出した。

ここ五日、義輝方とて無為に過ごしていたわけではない。得た情報から将軍・足利義栄が出陣していないことが分かっている。三好方の総大将は管領・細川信良である。となれば、義栄は何処に居るのか。京であるのは間違いなく。叡山まで出向けば場所は知れるだろう。こちらが大軍である以上、京には三好方とて大した兵は残っていないものと予測できる。ならば、急襲するのみ。上手く行けば、敵の動揺を誘うことが出来る。

「仔細は分かった。されど叡山は禁制の地、軍勢は通れまいぞ」

「承知しております。されど覚慶様の御尽力があれば、あるいは……」

大軍を動かせば、相手方にも知れる。しかし、光秀が実質動かせる

兵は斎藤勢の三百のみ。それならば夜陰に紛れて琵琶湖を渡り、叡山を経て京に至ることは出来る。必要なのは、延暦寺の許可のみだ。

「分かった。何でもすると申した以上、叡山でも何処へでも行こう」

「有り難き仕合わせ！」

光秀は喜び勇んで義輝に許可を得るべく目通りを願った。初めは五千の兵を預かる大将が軽々しく動くべきではないと光秀を宥めた義輝だったが、光秀は己の下知に従わない美濃勢の実情を伝え、自分が隊を離れても問題がないことを説明した。

「十兵衛、覚慶を頼むぞ」

「はっ！」

義輝は延暦寺に対し、自分に協力してくれるよう書状を認(したた)め、光秀に渡す。

夜半、光秀は覚慶と共に琵琶湖を渡った。

＝＝＝

松永勢三万へ向けて采の代わりに振り下ろした。

「かかれぇぇいい！」

ついに合戦の火蓋は切って落とされた。

【続く】

第六幕　勢多対陣　―長逸、謎の余裕―（後書き）

次話投稿です。

次回は合戦編となります。全二回（もしくは三回）ほどで書きたいと思います。

第七幕　唐橋の激闘　―生きた伝説と鬼の意地―

十一月十四日。
近江国・勢多川

前将軍・足利義輝の怒号により、戦が始まった。

「かかれぇぇいい！」

義輝方の先鋒は上杉勢の柿崎景家である。先鋒と決められていた勢多城主・山岡景？は三好・松永方が二手に分かれて布陣していたために急遽、勢多一帯の地理に疎い上杉勢を支援することになった。一方で松永久秀が布陣した田上方面は予定通り蒲生定秀が先鋒を務める。

勢多川はとにかく川幅が広い。広いところでは二町（約２００ｍ）を越え、とても地勢を知らない者が簡単に軍勢が渡河できる川ではなかった。よって大部分では両者が対峙するも弓矢での応射や喚声が飛び交っている程度だ。とは言っても敵陣に届くほどの強弓を射れられる者はごく僅かなために、死傷者はほぼ出ていない。勢多城の南側は川幅が狭くなっている箇所があり、山岡勢の支援で上杉勢の渡河が始まっていた。

「怯むな！楯を構えよ！慌てず進めい！」

景家の命令で兵士たちは弓矢に備え、楯を押し立てて徐々に三好方へ接近する。三好勢の先鋒・三好政康は麾下の将・池田勝正に命じてこれに当たらせた。幾百、幾千もの矢が柿崎勢を襲う。しかし、柿崎勢はこれに倒れる者はいれど、一兵一兵が脇目もふらずに前進

を続けている。

「ええい！小賢しい真似を！！」

横一列に並んだ楯が迫ってくるのには得も言われぬ威圧感がある。部隊は着実に敵陣へ近づいていった。

その様子を岸から眺めていた景家は満足そうに頷き、馬首を北へ転じた。

勢多川の北側には勢多川唯一の橋が架かっている。唐橋で有名なこの橋は、平時なら多くの人が行き交う交通の要所である。この橋を、三好方は落とさずにいた。故にこの橋さえ占拠してしまえば、上杉勢は安全に川を渡ることが出来る。この橋を確保するのが、先陣たる景家の任務である。

「突っ込めぇぇぇ！！」

景家が自ら手勢を率いて橋を渡る。喚声を上げて駆け走る集団が一条の矢の如くなり、敵に向かっていく。この突進力こそが柿崎勢の強みである。第四次川中島合戦で武田本隊を壊滅寸前まで追い込んだのは、先陣を務めた自分である。その自負が、景家の誇りであった。

だが、景家の槍は敵に届くことはなかった。

「撃てぃ！」

景家の足を止めたのは二百挺近い鉄砲だった。景家…いや上杉勢はこれまで鉄砲の一斉射を受けたことなかった。上方でこそ鉄砲の流

通は進んでいるが、東国では大名や在地領主がいくらか持っているだけで本格的に戦闘で使用したことはない。

この初めての出来事に、景家は思わず足を止めてしまったのだ。

「突っ込むしか能のない阿呆が！これだから田舎者は困る」

政康が大仰に笑う。唐橋は重要地であるために政康が自ら指揮を取って守っていたのだ。

「おのれッ！鉄砲とは卑怯な！」

叫んだところで状況が変わるわけでもなかった。鉄砲の応射は上方では一般的になりつつあり、その重要性は増しつつある。槍を付けられなかったことは、常に上杉勢の先鋒を務めてきた景家の誇りは大きく傷つけられた。だが景家が思いつく対処法といえば、弓矢と同じく楯を構えてひたすら進むしかなかった。

上方の戦が地方の戦と違うことをまざまざと見せつけられた瞬間だった。

＝＝＝

「撃てぃ！」

友照の号令で鉄砲が火を噴く。ばたばたと足軽が倒れるが、柿崎勢ほどの混乱はない。蒲生勢は鉄砲に慣れており、自身の部隊にも鉄砲を持たせている。倒れた仲間の屍を踏み越え、前進を続ける。

「撃ち返せッ！」

今度は蒲生勢の反撃で高山勢が倒れる。応射が続く中、数に勝る蒲生勢が少しずつ押し込んでいく。定秀としては、主君が出陣していない以上は先陣を任せられた自分が醜態を晒すわけにはいかなかった。

「さて、問題はこれからじゃが……」

ただ定秀には一つ心配があった。浅井長政が本気で蒲生勢を支援してくれるかどうかだ。

今さら言う話ではないが、定秀の仕える六角家と浅井家は現在も交戦状態にある。今こうして同じ軍に身を置いているのは足利義輝という存在があるからでしかない。だが浅井としては、義兄・織田信長三万の援軍がある以上、必ずしも六角の協力は必要なく、蒲生勢が壊滅してしまっても何も問題はない。むしろ、今後のことを考えると潰れてしまった方が都合がいい。

「殿、今後のことを考えまするとと、即座の出撃は見送られるべきかと」

「その様な考え方は好かぬ！今の蒲生殿は味方じゃ！左様に心得ておけ！」

だが浅井長政という男は冷酷な策士や非道な人物ではなく、義を重んじる男だった。家臣の進言を退け、定秀を安心させるために早々に兵を進めた。

「皆！これまでの遺恨は一時棚上げじゃ。蒲生殿を支援せよ」

長政は軍団を二つに分けた。一方は自らが率い、蒲生勢を支援する。もう一方は磯野員昌に預けて大戸川の東側から渡河させた。すかさず久秀も奥田忠高に一手を預け、両者は戦闘状態に入った。

＝＝＝

った。やはり元来、自分は武人なのだと思う。座って兵を指揮しているよりは動いている方が安心する。その様な気質なのだ。しかし、武家の棟梁である以上はそうであってはいけないのだろう。そういう意味では、昨今の将軍は武家の棟梁でなかったのだ。名目上の存在であり、実が伴っていなかった。権威はあったが権限がなかったから、自ら指揮する兵がおらず経験を養う場がなかった。

それは今でも同じだ。戦っているのは義輝派の大名衆であり、自家の兵ではない。

（だが、これからはそうあってはならぬ……のだろうな）

この戦いで勝てば、義輝は将軍家を強くしなければならない決心をした。己が手で領地を経営し、兵を養い、諸国の大名に匹敵、凌駕する軍団を作り上げなくては、足利将軍家は傀儡のまま操られるだけの存在で乱世を生き長らえるか、滅びるかになる。その点では、この上杉輝虎から学ぶべき事は多い。

「では上様の不安をこの輝虎が拭い去って参りましょう」

輝虎はニコッと笑うと、一礼して退出した。替わるように入ってきたのは朝倉義景だ。

義景は輝虎が本陣に詰めている間、殆ど義輝の傍を離れていた。輝虎が居ると義輝は輝虎とばかり話をするため面白くなかったのだ。体のいい理由を付けて自陣に戻っていた。

「上杉殿は御出陣ですか？」

「うむ。流石は輝虎よ。自軍が苦戦しておるというのにあの余裕じゃ」

「苦戦しているのならさっさと出陣して指揮を取れば良いと思いますが…」

こういう皮肉をところどころ交えてくる義景を義輝は好きにはなれなかった。輝虎がここにいたのは、偏に総大将である自分を思ってのことだ。その自分を置いて離れていた者の言う台詞ではない。

そして、その義景を邪険には出来ない自分が腹立だしかった。やはり朝倉勢が主力で中核なのだ。その当主たる義景の存在は大きい。

（上総介よ……早く余の許へ参れ）

義輝は朝倉勢に代わって主力に成り得る信長の到来を待ち焦がれた。

＝＝＝

「おおりゃあああ！！」
「せいぃやあ！！
景家は勢多橋の中央で暴れていた。対する相手は粗末な鎧だが大きな金砕棒を振り回して襲いかかる景家を相手に攻めの姿勢を貫いている。相当の腕前に思えた。
「よき勝負ではないか」
弥太郎は主命を受けた身だが、目の前の激闘に目を奪われた。十合、二十合と繰り広げられる戦いは、まさに死闘であり、弥太郎は固唾を呑んで見守った。
「死ねやッ！」
「ふんッ！！」
景家が鋭い突きを繰り出す。が、相手も流石だ。金砕棒を横薙ぎに払って景家の槍を吹っ飛ばした。
「ええい！この馬鹿力が！！」
「お主が非力なだけよ」
槍を失った景家が太刀を引き抜く。しかし、金砕棒の渾身の一撃が景家を襲う。咄嗟に刀で防いだ景家だったが、愛刀は砕け、自身は威力に押されて後方へ投げ出された。
「い…いかん！？」
武器を失った景家の敗北は必至だ。弥太郎は景家救出するべく唐橋へ急いだ。

「止めじゃ」
「ええい！舐めるなッ！」
金砕棒を振り下ろす男の腕を景家は懸命に抑えるが、男の馬鹿力に金砕棒の重みが加わり、とても抑えられそうにない。そこへ、横から貞興が痛打の一撃を浴びせて景家を救う。
「や…弥太郎か。いらぬ真似を……」
「討たれる寸前だったではないか。大人しく後方で休んでおれ」
「何を申すか！このまま引き下がれるかッ！！」
「獲物もなければ戦えまい。ここは儂が引き受ける」
「…ううむ。獲物を取ってくるまでだぞ。いいな」
「ああ、わかっておるわ」
意地でも己の負けを認めようとしない景家は、憮然とした表情をしたまま後方へ下がっていった。
「儂に不意打ちとはいい度胸じゃのう。覚悟は出来ておろうな」
「ああ、貴様を討つ覚悟ならな」
男は立ち上がり、金砕棒を拾いながら弥太郎へ身体を向ける。
「上杉が臣、小島弥太郎じゃ」
「ほう…名乗りを上げるとは。やはり田舎者は古くさい」
源平合戦以来、一騎打ちが戦の華として語られなくなって久しい。特に上方での戦は殆ど組織戦に変貌しており、太刀を振るって暴れることはあっても正々堂々名乗りあって戦うことはない。だが、そういう古くさいことが実のところこの男は嫌いではなかった。

「十河存保が家臣、阿波国人・七条兼仲である」

まだ二十歳前後に見える若者の両腕は“鬼”の異名を持つ小島弥太郎の倍はあろうかと思うくらい太かった。この豪腕から繰り出される金砕棒の一撃の凄まじさは無数の穴が空いた唐橋が物語っている。御陰で兵卒の移動がままならなくなっており、周囲で戦っている兵も僅かに数十といったところだ。ただ兼仲が陣取ってることで、鉄砲が飛んで来ないことは幸いだった。

「煩い小僧め！その生意気な口を塞いでくれるわ！」

「フン！雑魚が」

兼仲が金砕棒を振るう。弥太郎はこれを槍で受けるような真似はしない。受ければどういう結果になるか、景家との戦いで見ている。隙を見て槍を突くが、相手も流石の腕前で簡単に防がれてしまう。

「ならば……」

狙うは相手が金砕棒を振るい終わった時、その瞬間ならこちらの攻撃を防ぐ手立てはないはずだ。重量のある金砕棒はよほどの豪傑した用いることのできない武器であり、防御不可能の代物だが、あくまでも一撃必殺の武器な為に、その後に出来る隙は大きい。

一合、二合、三合と隙を窺う。そして十三合目、痺れを切らした兼仲が不用意に上段から力任せに金砕棒を振り下ろしてきた。

「もらった！」

これを上手く躱した弥太郎が渾身の力を込めて槍を突き出す。しか

し、結果は弥太郎の予想を反するものだった。

「甘いわ」

驚くべき事に、目の前の男はまるで棒切れを扱うかの如く、金砕棒を切り返してきたのだ。弥太郎の槍は叩き折られ、突きだした利き手に強烈な痺れが走った。

「うぐ……この化け物め」

「死ね」

再び金砕棒が弥太郎へ向けて振り下ろされる。

「くっ……」

「ちっ、逃げるのが上手い」

弥太郎は地面を蹴り、後方に飛ぶことで咄嗟に攻撃を避けた。

「諦めよ。力の差は分かったであろう」

兼仲が勝者の笑みを浮かべ、近づいてくる。弥太郎は刀を抜きたいところだが、利き手は痺れていて使い物にならない。

（こんなところで負けられるか！実城様、悲願の上洛ぞ！それも最初の戦の最初の戦いで……上杉の名に泥を塗るような真似は出来ぬ！）

弥太郎は渾身の力を込めて地面を蹴る。腕が使えないのなら、己の全てを使って相手にぶつけようというだ。

「お…お」

兼仲は弥太郎の思わぬ行動に反応できなかった。その身で突貫してきた弥太郎に激突され、後ろへ倒れ込む。頭は地面に叩きつけられ、軽い脳震盪(のうしんとう)を起こした。

兼仲に馬乗りになる形になった弥太郎が利き腕でない手で短刀を引き抜き、兼仲の喉元へ目がけて振り下ろしてくる。兼仲は朦朧(もうろう)とする意識の中で弥太郎の首筋を掴み、思いっきり締め上げた。

「う…が…がご……」

首を締め上げられた弥太郎の顔が苦痛に歪む。だが弥太郎の眼は死んでいなかった。ギロリと兼仲を見据え、短刀を止めることなく振り下ろした。

「ぐはっ……」

弥太郎は口から血反吐を吐いた。そして意識を失う。だが、それまでだった。力なく倒れ込んだ弥太郎の下では、“生きた伝説”と称された七条兼仲が死んでいたのだ。

“鬼小島”の勝利だった。

「まったく…あの化け物を退治するなど、大したものよ。上杉一の侍は、そなたのようだ」

駆け寄った景家が、意識を失っている弥太郎へ最大限の讃辞を送った。

「後は儂に任せて休んでおれ」

景家は家臣に弥太郎の介抱を命じると、配下の兵を従えて敵中へ乗り込んで行く。兼仲という防波堤をなくした三好方は意気消沈し、精度の鈍った鉄砲だけでもはや景家の突撃を押し止めることは不可能だった。

勢多の唐橋は、上杉勢が占拠した。

【続く】

第七幕　唐橋の激闘　―生きた伝説と鬼の意地―（後書き）

合戦前編です。

いや、合戦を上手く書くって難しいですね。（半分は一騎打ちですが…）今回は上杉勢中心でしたが、次話は他の陣営についても書いていきます。

第八幕　乱世の大義　―面従腹背の徒、出陣す―

十一月十四日。
洛中北部

勢多で合戦が始まる僅かに前、比叡山の麓、若狭街道近くに明智光秀はいた。

「やはり義栄は、長門守（京極高吉）様の情報通り相国寺に移っているようです」
「慈照寺ではないと？」
「はっ。三好方の兵も相国寺に出入りしております」

覚慶が身の証を立てたことにより、延暦寺から叡山の通行許可を得られた光秀ら斎藤利三隊三百は、無事に洛北に辿り着いていた。

前情報では、義栄は近衛前久の別邸がある慈照寺に居を置いているという話だった。しかし、延暦寺には幕臣・京極高吉が逃げ込んでおり、高吉は義栄が相国寺にいると報せてきた。この事は比叡山を抜けて義栄襲撃を狙う光秀に取っては好都合だった。何せ相国寺は慈照寺に比べ、いま光秀たちがいる時点より近い。

「相国寺の兵は？」
「凡そ八百。如何します？」
「やる。こちらの倍以上とはいえ、将軍を守る兵じゃ。万全を期して退避しなくてはならぬはずだ」

こちらが寡兵とはいえ、義栄自身は自らを守る八百をけして多いとは思っていないはずだ。むしろ八百しか残していかなかったことを

不満に思っているはず。そこへ敵勢が襲いかかれば、どうなるか。

「よいか。無理はせぬ、義栄を相国寺から追いさえすればよい」

「将軍を討つ必要はないと？」

「我らがここにあるは義栄を討つためではない。中入りで勢多の敵勢の動揺を誘うことが目的じゃ。そういう意味では、我らが洛中に現れたというだけで目的は達しておる。その上、義栄を追えれば上々。それ以上を望むべきではない」

「なるほど…、そういうものですか」

欲のないことだ、と思う利三だった。自分なら迷わず“将軍・義栄の首”という大手柄を取りに行っただろう。しかし、明智光秀という男とはそうではないらしい。あくまでも目的を重視し、そのために何が必要かを探り、実行する。正直、ここまで整然とした男は戦国の世では珍しい。

「よし、参るぞ」

光秀らは若狭街道に出た。高野川沿いに南下して大原口より洛中へ入れば、相国寺はすぐである。隠れながら行くよりも、見つかる覚悟で進んだ方が早いとして軍勢は堂々と街道を進んだ。

その存在は、すぐに義栄のいる相国寺に知られることになる。

「ぐ…軍勢じゃと！？何処の軍勢じゃ。日向守（三好長逸）か？弾正（松永久秀）か？」

“謎の軍勢迫る”の急報を受けた義栄は、悲鳴を挙げるかの如く報せを寄越した者を問い質した。

「味方ではございませぬ。敵です！」
「て…き？」
義栄は状況がまったく把握できていなかった。そもそも現時点で戦が始まったという報せすら届いていない。なのに、洛中に敵勢が現れている。
「ともかく逃げるぞ！元々余はこのようなところに居たくはなかったのじゃ」
「お…お待ちを！敵の数はそう多くはありませぬ。ここで防戦を！」
「そんなこと分からぬではないか。後続があるやも知れぬ。いや、きっとそうじゃ。洛中に攻め入る以上、小勢であるはずはない」
として、義栄は相手を確認することなく一目散に相国寺を逃げ出した。久秀から将軍を京に留めておくように命令された者たちも、これを追いかけるのが精一杯であった。
相国寺に到着した光秀は、ある意味で呆然とした。義栄が戦うことなく逃げ出していたからだ。
「これで征夷大将軍とは恐れ入る。我らが上様とは大違いじゃ」
光秀の洛中中入りは成功した。京は早くも義輝方の手に落ちたのだ。
急報は、勢多へ飛んだ。
＝＝＝

近江国・勢多

「突っ込めーー！！」

馬上で上杉勢の先鋒・柿崎景家が号令を出す。足軽が長柄をかざして敵に突進する。一方で三好勢もこれに鉄砲で反撃、柿崎勢はばたばたと倒れる。

「ふん！同じ手しか使えぬ能なしめ」

既に唐橋は上杉勢が占拠しており、ここから味方が続々と渡ってきている。狭い橋の上で一塊になっているところを狙われるのとは違い、被害は多くはない。三好方とて七千を数える上杉勢全てに備えるだけの鉄砲を有しているわけではないのだ。

「蹴散らしてくれる」

景家は唐橋での鬱憤を晴らすかの如く、自らも敵陣へ斬り込んで行った。

その様子は、主君たる上杉輝虎の許へも届けられる。

「景家め。弥太郎のことがよほど効いたと見える」

「そのようですな。この分だと敵の先陣を崩すのは時間の問題かと」

「そうかな？」

輝虎の許には敵勢の様子も伝わってきている。三好政康と池田勝正が前線にて兵を叱咤して、柿崎勢の猛攻を防いでいるという。大将自ら戦陣に加わるとなると、部隊はかなり強くなる。特に政康は三好三人衆の一人であり、敵首脳の一人である。それが最前線に出て

きていることを考えれば、容易に突破は出来ないと見るべきだろう。

「ならば斎藤か甘粕の部隊に出撃を命じますか？」

「いや、儂が出よう」

「実城様自ら！？」

輝虎と共に本陣に詰めていた本庄実乃は心の中で深い溜息をついた。また主君の悪い癖が出たと思っているのだ。

輝虎は総大将であるにも関わらず戦になると自ら出撃したくなる性分で有り、関東管領となった後もそれは変わらなかった。第四次川中島合戦では総大将自らが敵本陣に斬り込み、総大将同士が刃を交えるという前代未聞の出来事に発展した。

実乃が不服そうな面持ちで主君を見る。

「実乃、そう嫌そうな顔をするな。そなたの言いたいことは分かる。されどな、此度の戦は儂は総大将ではない。総大将は上様である。ならば儂は上様の一兵卒となり、敵を討つのみ」

「総大将ではない、という理屈は分かります。されど一兵卒と一軍を率いる将は違い申す！」

所詮、輝虎の言は前に出たいだけの屁理屈と思っている実乃は、諫言して思い留まらせようとする。しかし、今日の輝虎は信頼する側近の言葉すら聞く耳はなかった。

「儂が越後より参ったはこの時のため。上様の兵となり、上様の馬前で槍を振るう。この瞬間を、儂は夢見てきたのだ」

「御実城様……」

「実乃、分かってくれるな」

「……仕方ありませぬな。ならば、手前も御供させて下され」
「おう！ならばどちらが多く敵の首級を挙げるか競争しようぞ」
側近の同意を得た輝虎は、まるで少年のように瞳を輝かせた。
「やれやれ、こんな年寄り相手に何を言い出すかと思えば…」
「ならば儂の不戦勝じゃな」
「なんの！まだまだ若い者には負けませぬぞ！」
かくして上杉全軍の出撃が決まった。
＝＝＝

「退けッ！退けぇ！！」

すかさず竹内勢も後退を命じる。浅井勢の連戦連勝であり、後詰めの西美濃勢に出る幕はなかった。しかし、大戸川一帯を制した長政が見たのは、堂山、笹間ヶ岳を要害とした松永久秀の陣城であった。

「むう…上杉殿が言っておられたのはこのことか……」

長政は軍議で輝虎がしきりに開戦に慎重であったことを思い出した。全軍に停止を命じ、不用意に陣城へ攻めかからぬよう厳命する。

「如何します？」

長政と共に兵を進めてきた蒲生定秀が訊く。今や定秀は長政の人柄に信頼を置いており、敵同士である感覚を忘れつつあった。

「松永勢は八千と聞く。ならば不用意に攻めかかる訳には参らぬ。西美濃衆を呼び寄せてから一当てしてみても遅くはありますまい。後は、相手の出方次第にて」

「ふむ。それは確かに……」

定秀は改めて長政が若く血気に逸るだけの将ではないことを知った。己が主君が負けるのも頷けるというもの。何せ定秀の主君は己を大人物とし、他を侮る性格の持ち主だった。だから相手を見抜けず、思わぬ落とし穴に落ちることが多い。先の御家騒動など、その良い例だ。

今から二年前、六角家中で御家騒動があった。きっかけは、当主・義治が宿老・後藤賢豊を観音寺城内で暗殺したことだ。六角家は上方で三好長慶に破れ、支配下にあった浅井家にも独立されて当主の

権威が低下していた。そこで義治は当主の権限を回復するべく重臣の一人を“無礼討ち”と称して断じたのだ。

賢豊は家中からの人望に篤く、それを信じる者は皆無だった。それ故に六角承偵と義治は一時的に居城を追われた。これを取りなし、復帰させたのは他ならぬ定秀である。

正直、莫迦なことをしたものだ、と定秀は思っている。何をしたところで、当主たるものに刃向かえる訳がないと考えているのだ。騒動を経た今も、主君が考えを変えた様子はない。

ただ定秀は、その主君が今まさに動こうとしているなど夢にも思っていなかった。

＝＝＝

承偵は我が子を諭すように教える。

「よいか、我が六角家は将軍家の忠臣じゃ。我が父、そなたの祖父は将軍様を御扶けし、管領代まで務めた。儂とてそれは同じ。お主の代になったところで、それは変わらぬ」

「そこがわかりませぬ。我らは長らく義輝公を御扶けして参りました。されど父上がなさろうとしておることは、その逆ではありませぬか」

「逆ではない。いま申したであろう。我が六角家は“将軍家”の忠臣じゃと。ならば、此度の戦でも我らは将軍様を御扶けせねばならぬ。将軍・足利義栄様をな。それが、我らが家の大義じゃ」

承偵は以前から松永久秀と通じていた。永禄の変では義輝の逃亡先を伝え、今回の上洛戦では義輝方の情報を流した。

「我が領内に入ってきた不埒者どもらを成敗せねば、近江守護の面目も失う」

永原城には凡そ六千もの兵が屯している。義輝にも宿老の定秀にもばれずに集められる限界の数だった。これが義輝の後方から襲うことになっている。義輝は承偵を味方と信じて疑っておらず、東にはまったく警戒していない。これだけの数でも、戦の決定打となるは疑いなかった。そのため、三好・松永らは貝に閉じこもるかの如く、守勢に徹している。

「しかし、義輝様の軍勢には蒲生を遣わしておりますが……」

「口煩い左兵衛大夫（定秀）など、知ったことか。それよりもな、義治。此度の合戦には憎き浅井も加わっておることを忘れるでない。戦に勝利した暁には、近江全土が我が物となるのじゃ。京より東は、

好きにしてよいと義栄公からも言われておる。加えて主従の分を越えて意見してくる左兵衛大夫もいなくなるし、将軍様への忠義も示せる。まさに一石二鳥、いや三鳥か」

承偵はほくそ笑み、ひとり悦に浸っていた。自分自身でこれ以上はない完璧な策略を張り巡らしたと考えている。

「義治よ。本物の軍略が如何なるものか、よう見ておくのじゃ」

呆気にとられる義治を余所に、承偵が出陣の命を下す。直後、六角軍六千が永原城を出て東山道を西へ進んだ。義輝の背後を襲うために。

義輝が三好・松永と死闘を繰り広げている勢多まで、僅か一刻半（3時間）で辿り着ける距離だった。

【続く】

第八幕　乱世の大義　―面従腹背の徒、出陣す―（後書き）

合戦中編です。

ということは次で終わりなのですが、なんとか目標としていた上洛編は今年中に書き終えそうです。もうあと４～５回ほどでしょうか…まぁギリギリですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4359y/

剣聖将軍記

2011年12月23日00時45分発行